第四章　玉鬘の物語　宮中出仕から鬚黒邸へ

［第一段　玉鬘、新年になって参内］

かかることどもの騒ぎに（このような事柄の騒動に）、尚侍の君の御けしき（尚侍の君の御機嫌が）、いよいよ晴れ間なきを（ますます曇りがちなのを）、大将は（だいしゃうは）、いとほしと思ひあつかひきこえて（引け目に思い譲歩申して）、

「この参りたまはむとありしことも（この度の出仕なさろうという話があったことも）、絶え切れて（中止になって）、妨げきこえつるを（反対申しましたが）、内裏にも（帝に於かせられても）、*なめく心あるさまに聞こしめし（私を女官軽視とお聞きあそばし）、人びとも*思すところあらむ（諸侯も同様に私の事をご懸念なさっているらしい）。*公人を*頼みたる人はなくやはある（女官を妻に持つ者が居ないでも無い、ので此の際、そうした懸念を晴らす意味でも其方の出仕を認めよう）」　*「なめし」は＜無礼だ。無作法だ。＞と古語辞典にある。が、大将が帝に対して礼を失しては命取りなので、これは「なめく心あるさま」を一纏めに考えるべき語に見える。ところで、現代語の「なめられる」「なめたまね」の「なめる」は＜みくびる、軽んじる＞で、無礼には至らないと言うよりは、礼という格式以前の気持ちそのものに対する修辞に見える。この語感は近そうだ。つまり、「なめく心あるさま」は＜大将が尚侍という公職を軽く考える価値観がある様子→女官軽視＞なのだろう。　*「思すところ」に付いては、注に＜「人びと」は「思す」という敬語が使われているので、源氏や内大臣などをさす。「思すところ」とは不快にお思いになることをいう。＞とある。大将にとって実質で最も配慮すべきは、帝や源氏殿ではなく内大臣の意向に違いない。　*「おほやけびと」は＜公職に就く役人＞だが、此処では尚侍の君のことだから＜女官＞。　*「頼む」は＜伴侶として頼る→夫・妻にする＞。

と思ひ返して（と考え直して）、年返りて（年が改まってから）、参らせたてまつりたまふ（尚侍君を御所に参内させ申すことに為さいます）。*男踏歌ありければ（正月十四日に男踏歌が予定されていたので）、*やがてそのほどに（ちょうどその賑わいに間に合うように）、儀式いといまめかしく（儀式次第をたいそう盛大にして）、二なくて参りたまふ（またとない麗々しさで尚侍君は参内なさいました）。　*「をとこたふか」は注に＜正月十四日に行われる行事。「末摘花」「初音」巻にも見えた。ここでは、玉鬘参内が「けれ」（過去の助動詞）「ば」とあり、過去の出来事という視点に立って語られる。＞とある。が、「ありければ」と言っても、下に「参りたまふ」と現在形で語られることからして、「男踏歌ありければ」は＜男踏歌が行なわれたので＞ではなく＜男踏歌が有ることになっていた、予定されていた、ので＞だ。また、男踏歌は隔年ないし数年隔てて行なわれたらしく、この年は有った、という事態の高揚感と共に、正月十四日の日付と其の時の都の華やいだ風情までも表す言い方、かと思う。　*「やがてそのほどに」に付いては、先読みからの意味付けになってしまうのは不本意だが、下に尚侍君が男踏歌を御所で見物した記事があるので、参内は踏歌より前に行なわれていて、「そのほど」が＜その前に＞か＜それに間に合うように＞くらいの言い方に見える。また「やがて」だが、これは＜そのまま続いて＞とか＜すぐさま＞とか＜他ならぬ＞などと古語辞典に説明され、現代語では＜そのうちに、結局は＞みたいな意味の語だ。ところで、この語の構造を少し推理すると、「て」は理由や経緯を示す接続助詞で、前句の活用語の連用形に付くもの、だとすれば前句の「が」は「勝ちて（増さって）」の短縮が有望で、「や」は「弥（いや、その勢いのままに）」を当てれば、「弥増さりて（その勢いがますます盛んになって）」とほぼ同じ意味になる。そして、その意味は「やがて」の古語辞典の説明にも反しない。で、此処で改めて「その」の意味を考えてみると、そ

れは＜男踏歌の賑わい＞であろうと目される。つまり、「やがてそのほどに」は＜他ならぬその男踏歌のお目出度さを弥増して祝える程の内に→ちょうどその賑わいに間に合うように＞という言い方だ。

かたがたの大臣たち(両大臣たちに)、この大将の御勢ひさへさしあひ(この大将の御権勢まで加わった豪勢さの参内式で)、宰相中将(源氏の参議中将が)、ねむごろに心しらひきこえたまふ(丁重に案内役を務めなさいます)。兄弟の(せうとの、内大臣家の)君達も(子息たちも)、かかる折にと集ひ(この時とばかりに集まって)、追従し寄りて(尚侍君の後を付いて回って)、かしづきたまふさま(貴公子たちが寄ってお世話なさる光景は)、いとめでたし(何と晴れがましい)。

*承香殿の東面に御局したり。西に*宮の女御はおはしければ、*馬道ばかりの隔てなるに、御心のうちは、遥かに隔たりけむかし。御方々、いづれとなく挑み交はしたまひて、内裏わたり、心にくくをかしきころほひなり。　*「しょうきゃうでんのひんがしおもてにみつぼねしたり」は注に＜承香殿は東西に長い建物。玉鬘はその東面の間をお部屋とした。＞とある。承香殿は内裏中央の後宮としては最も南表に位置する格式高い舎殿らしい。 *「みやのにょうご」は注に＜承香殿の西面の間を式部卿宮の女御がお部屋としていた。＞とある。　*「めだう」は承香殿の中央を南北に通す長廊下。平面図で見ると後宮にしては公共性が高いのだろうか、広めで２間(４m)くらいありそうだ。

ことに乱りがはしき更衣たち(特に後宮秩序を乱しがちな更衣のような身分の低い者は)、あまたもさぶらひたまはず(あまり御仕え為さらず、)。中宮、弘徽殿女御、この宮の女御、左の*大殿の女御などさぶらひたまふ。*さては(更衣としては)、中納言、宰相の御女二人ばかりぞさぶらひたまひける。　*「おほとの」は此処では＜大臣の尊称＞で、「左の大殿」は＜左大臣＞らしい。左右大臣は朱雀帝時代からの引継ぎで藤原右家筋が占めている、かと思う。大臣だから二位だろうし個人的な、と言っても家格を保持しうるだけの人員を含めた、手当ては相当な額を支給されていただろうが、実権は源氏殿の太政大臣と藤原左家筆頭の内大臣に譲り、したがって権勢を実質で示す組織動員力は少なく、そういう形で各位が了承した妥協の産物という体制、かと思う。実質で権勢を振るった藤原右家筆頭こそが右大将その人であり、源氏殿や藤原殿から見て次世代の人であり、源中将や藤原中将がその次世代、という概観。　*「さては」の指示副詞「さ」は「更衣たち数多も侍ひ給はず」のことで、「おんむすめふたりばかり」がその数少ない更衣らしい。注には＜中納言、宰相は系図不明の人々。更衣である。＞とある。

［第二段　男踏歌、貴顕の邸を回る］

*踏歌は(踏歌という節会は)、*方々に里人参り(それぞれの御方のお部屋に実家の人々がお祝いに参上し)、*さまことに(他の宮中行事と違って)、けにぎははしき見物なれば(特に賑やかな催し物なので)、誰も誰もきよらを尽くし(どなたもが華美の限りに)、袖口の重なり(袖口の色の重なりを)、こちたくめでたくととのへたまふ(目に痛いほど派手に整えなさいます)。　*「踏歌は」という主語が「にぎははしき見物なり」を述語とする構文。「方々に里人参り」は補足説明だ。此処で「踏歌」の概要を押さえて置くと、「踏歌節会(たふかのせちゑ)」は宮中の新年祝賀行事だから、その開催自体が今上帝の御世で新年を迎えた喜びを示す天皇礼賛であり、富国豊穣の感謝祭であり、踊りである以上は豊作と無病息災の祈願を込めた儀式には違いない。「風俗博物館」サイトの「六条院四季の移ろい」トピックの「睦月」ページの「踏歌節会」パートの説明文には＜『西宮記』等によれば、十四日の男踏歌は清涼殿（せいりょうでん）に天皇が出御し、舞人・歌人が楽を奏しつつ東庭に列立し、踏歌を行い、御前で祝詞（のりと）を奏上する。その後内侍（ないし）が歌人に綿

を被（かづ）け、歌人は催馬楽（さいばら）の「竹河」という曲を歌う。それがすむと舞人・歌人は市中に出、京の各所で踏歌を行い、諸所に設けられた「水駅（みずうまや）」で飲食をして休息をとった。そして明け方に再び宮中に戻り、酒饌を賜り、管絃が行われて天皇より禄（ろく）を賜った。＞とある。引用が長くなるのは我ながら煩わしいが、こうした説明や、何より風俗博物館などの各種展示物および其等のウエブ掲載写真類無しには、当時の様子が現代の生活様式と余りにもかけ離れているので、この物語の文字だけで物事を理解するには、私には手掛かりが無さ過ぎる。つまり男踏歌は宮中のみならず、徹夜で市中の貴顕を廻るというハジケぶりだったようだが、それも新年祝賀のお目出度さがなせる勢い任せの洒落で、しかし其れこそが御世の円熟や円満振りを形に示す風情ではあったのだろう。だから作者は、この男踏歌の場面を何度も舞台設定に用いた、ようにも思う。ところが実は、この物語が記されたであろう一条天皇の御世の藤原道長の内覧期である 1010 年頃は疾うに男踏歌は中止されていたらしい。再び「風俗博物館」サイトの説明を頼ると＜十六日の女踏歌は数十人の舞妓が紫宸殿（ししんでん）の南庭で踏歌をする。これは宮中にのみ行われるもので、市中へは出ず、したがって「水駅」も設けられない。男踏歌は平安中期、円融天皇の時代に絶えてしまったので、以降、「踏歌」といえば女踏歌をさすことになった。＞とある。円融天皇の御世は 969－984 年とあるが、この時代は其の前の冷泉天皇代の左大臣であった源高明（みなもとのたかあきら）が失脚して、藤原伊尹（ふじわらこれただ）・兼通（かねみち）・兼家（かねいえ）の藤原摂関家の兄弟間での権力闘争が熾烈だった期間そのもので、結局は道長の父である兼家が太政大臣として藤原氏を掌握して一条天皇代の安定基盤を作るに至った、という経緯だったようだ。ということは、男踏歌は摂関家内の覇権争いに利用されたか、その影響を受けたかで、実際に荒れたのか、荒れる印象を持たれたかで、其の収束を図って取り止めにされた、のかも知れない。その中止理由は子細不明だが、ともかく出筆当時は中止されていた行事を持ち出す作者の意図は何なのか。40 年ほどの少し前まで行なわれていた行事とは言え、当時の様子を作者自身が見たとは思えず、単に情緒を懐かしんだ懐古趣味ではなさそうだ。ただ、当時を知る人の話は聞けただろうから、其の華やぎを憧れたという事はあるのかも知れない。しかし、それ以上に確からしいのは、男踏歌に絡んで入内工作をする源氏殿周辺の動向記事が、当時の読者に源高明の失脚前夜という事情を思い起こさせるには十分であっただろうことだ。平安朝期では既に梯子を外されて文字通りの雲上人に祭り上げられていたであろう前時代の権威たる王族や古参貴族が、下部組織を隅々にまで支配した藤原家の内部抗争時代を如何生きたか、は其こそがこの物語そのものだと見る向きもあるようで、「いづれのおほんときにか」と作者はわざわざ桐壺帝を架空だと断っているのに、それを醍醐天皇だと決め付けて読んでも、従って其の更衣腹の第十皇子の源高明を光源氏に、高明の腹違いの兄宮である朱雀天皇を朱雀帝に、高明の腹違いの弟宮の村上天皇および村上天皇の子の冷泉天皇を合わせて今上帝に、兼家あたりが内大臣、ということは道長が右大将、などと当てはめて見ても、そこそこ話の辻褄が合いそうな筋立てではあるらしい。私としては、源高明の事情など全く知らずに此処まで読んで来て、この「踏歌」の話題でこうした背景を日本史年表や諸参照ページなどから拾っている訳だが、それらに符合する記事が多い読み方になっているという点に於いては、当時は摂関政治体制だったという時代認識の重要性を改めて思う次第だ　*「かたがたにさとびとまゐり」の「かたがた」は＜後宮の御方々＞の意味らしい。当時の習わしを知らなければ、この言葉だけでは何を言っているのか分からない言い方だ。また、「里人」が勝手に内裏に押し掛ける事は出来ないだろうから、御方々が出席者を主上に申請たてまつるにしても、形式的には帝から祝宴に招かれた客ということなのだろう。　*「さまことに」は祝宴の様式のこと、かと思う。よく知らないが多分、普通の祝宴は公式の儀式で御所表で行なわれ、このように内裏に女性客を迎えることはなかった、のだろう。

*春宮の女御も（後宮の昭陽舎は梨壺に皇太子と同居していらっしゃる皇太子の母君は）、いとはなやかにもてなしたまひて（とても派手に着飾りなさって）、*宮は（皇太子は）、まだ若くおはしませど（まだ 12 歳と若くいらしたが）、すべていと今めかし（母君の見立てか、すべて最先端の

装いでいらっしゃいます)。　*「とうぐうのにょうご」は注に＜朱雀院の女御で鬚黒の妹。今、春宮の母女御として梨壷に住む。「澪標」巻参照。＞とある。「女御」は帝の妃を意味する気がして、こういう呼称には違和感を覚えるが、当時の人自身がこういう言い方をしているのだから、むしろ「女御」とは＜後宮に部屋住みする高位女官＞という意味なのかと再認識させられる。ただ、朱雀院が此のかつての承香殿女御であった従妹の第一妃を在位中に立后していれば、「春宮の女御」として後宮に留まる事は出来ずに朱雀院の女主人となっていたのだろう。あえて立后を拒むことなど妃自身に出来る筈も無いが、皇后の座を望まない姿勢を見せることは出来たかも知れない。とすれば、皇太子が即位すれば大后となることは決まっているので、その事だけを励みに生きていたのかも知れない。「澪標」巻第三章第三段の今からは九年前のこととなる、今上帝に譲位した直後の朱雀院およびその妃たちの動向記事には＜院はのどやかに思しなりて、時々につけて、をかしき御遊びなど、好ましげにておはします。女御、更衣、みな例のごとさぶらひたまへど、春宮の御母女御のみぞ、とり立てて時めきたまふこともなく、尚侍の君の御おぼえにおし消たれたまへりしを、かく引き変へ、めでたき御幸ひにて、離れ出でて宮に添ひたてまつりたまへる。＞とあり、さらに源氏殿との関係では＜この大臣の御宿直所は、昔の淑景舎なり。梨壷に春宮はおはしませば、近隣の御心寄せに、何ごとも聞こえ通ひて、宮をも後見たてまつりたまふ。＞という記事もあった。この御母女御の子は皇太子一人だったのか、他の子は実家の藤原右家で育てていたのか、その辺の事は分からないが、33 歳の右大将の妹であれば 31，2 歳くらいだろうか。　*「みや」は注に＜春宮はまだお若くいらっしゃるが。十二歳。元服適齢期である。＞とある。確かに、「澪標」巻第一章第三段の今上帝ご即位の記事では＜明くる年の如月に、春宮の御元服のことあり。十一になりたまへど、ほどよりおほきに、おとなしうきよらにて、ただ源氏の大納言の御顔を二つに写したらむやうに見えたまふ。いとまばゆきまで光りあひたまへるを、世人めでたきものに聞こゆれど、母宮は、いみじうかたはらいたきことに、あいなく御心を尽くしたまふ。内裏にも、めでたしと見たてまつりたまひて、世の中譲りきこえたまふべきことなど、なつかしう聞こえ知らせたまふ。同じ月の二十余日、御国譲りのこと俄かなれば、大后思しあわてたり。「かひなきさまながらも、心のどかに御覧ぜらるべきことを思ふなり」とぞ、聞こえ慰めたまひける。坊には承香殿の皇子ゐたまひぬ。＞とあって、「まだ若くおはしませど」という言い方は＜まだ元服前の親掛かりなので＞という意味かも知れない。藤原右家の派手好みは家風らしい。

*御前、中宮の御方、朱雀院とに参りて、夜いたう更けにければ、*六条の院には、このたびは所狭しとはぶきたまふ。朱雀院より帰り参りて、春宮の御方々めぐるほどに、夜明けぬ。　*「おまへ～よあけぬ」については、注に＜踏歌の一行が巡る順路である。帝の御前、すなわち清涼殿東庭から梅壷の中宮の御前、内裏を出て、上皇御所の朱雀院へと向かう。そして最後に内裏の梨壷の春宮の御前へと帰って来る。＞とある。梅壷は後宮西側で、清涼殿東庭からそのまま北へ少し歩いた所だから、どの門を通ったのかは分からないが、ほぼそのままの流れで御所をいったん退出して、三条かと思われる朱雀院まで踏歌隊は進み、そこで一頻り宴席の飲み食いをして、また御所に戻り、今度は後宮東側の梨壷前で歌い舞うという次第のようだ。「春宮の御方々」は春宮と春宮の女御のことだろうが、梨壷の南表は承香殿の東表に当たるという位置関係だ。私などは内裏の位置図を見ながら意味を探ろうとするが、当時の読者はこの本文だけで位置関係も装束の色形も音曲歌舞も香の匂いも想起されたのだろうか。雅だ。ところで、こうした順路は先に参照した「風俗博物館」サイトの説明に有った『西宮記』の引用内容にほぼ重なる。「西宮記(さいきゅうき)」は＜平安時代の有職故実書。源高明著。村上天皇のころの公事(くじ)や朝儀、臨時の儀式、作法・装束・制度などについて漢文で解説。西宮日記。西宮抄。さいぐうき。せいきゅうき。＞と大辞泉にある。源高明は＜京都右京四条に壮麗な豪邸を建設し、西宮左大臣と呼ばれた。＞と Wikipedia にある。作者も西宮記を読みながら構想を練った、のかも知れない。　*「六条の院に～省き給ふ」の挿入句については、注に＜源氏の太政大臣邸の六条院は今回は仰々しいとという理由から省略なさる。「六条の院に」の格助詞「に」は尊敬の意、主格を表す。六条院におかれては。＞とある。「ところせし」を＜仰々しい＞としてあるが、「夜いたう

更けにければ」とあるので、朱雀院の三条から六条までは遠くて＜帰りがお開きの夜明けに間に合わないので→遅くなり過ぎるので＞と読む方が素直に見える。それも、当日になって予定より進行が遅くなったので、ということではないだろう。踏歌隊は若い貴公子たちだ。初音巻にあった一昨年の男踏歌では貴公子たちに西の対の姫をお披露目することが主眼で遠い六条院まで一行を招いたのだ。しかし今回は、尚侍君となった対の姫は内裏に居るので、お披露目では無いが、若い貴公子たちが其の新しい女官とその女房たちとの歓談を互いに楽しむ張り合いに応えるべく順路を六条院源氏殿は考えた、のだろう。即ち、「春宮の御方々めぐるほどに夜明けぬ」ように進行予定を組むのが気の利いた采配なのだ。人気取りが大事な政治手腕なのは古今東西変わりない。いざと言う時に人を動かすのは、日頃の懐柔策の賜物だ。だから、意図して＜外しなさった＞のだ。

ほのぼのとをかしき朝ぼらけに（空がほのぼのと白む風情ある初春の明け方に）、いたく酔ひ乱れたるさまして（だいぶ酔いが回った様子で）、「*竹河」謡ひけるほどを見れば（「竹河」を謡っている集団を見ると）、内の大殿の君達は（内大臣家の子息たちの）、四、五人ばかり（四、五人ほどが）、殿上人のなかに（その貴公子たちの中で）、声すぐれ（声も良く）、容貌きよげにて（姿も目だって）、*うち続きたまへる（打ち揃っていらっしゃるのは）、いとめでたし（とても素晴らしい）。 *「たけかは」は注に＜催馬楽、呂。「竹河の橋の詰めなるや橋の詰めなるや花園にはれ花園に我をば放てや少女たぐへて」。「初音」巻の踏歌の折にも歌われた。＞とある。「少女たぐへて」は「めざし伴へて」で＜女の子と一緒に＞なので、筋は＜橋の向こう側のいつもと違う所で女の子と一緒に花遊びをしよう＞という花柳界のコマーシャル・ソングみたいな歌、なんじゃないかな。　*「うち続く」は＜同じものが続く→揃う＞。

童なる八郎君は（童殿上の八郎君は）、むかひ腹にて（本妻の御子で）、いみじうかしづきたまふが（御両親が大変大事に育てていらっしゃって）、いとうつくしうて（とても可愛く）、大将殿の太郎君と立ち並みたるを（大将殿の太郎君と立ち並んでいるのを）、尚侍の君も（大将殿の妻である尚侍の君も）、よそ人と見たまはねば（どちらも他人ではないと御思いになって）、御目とまりけり（御目が止まりました）。　*「むかひばら」は「当腹」とあり＜現在の本妻が生んだこと。また、その子。＞と古語辞典にある。　*「よそびと」については、注に＜尚侍の君すなわち玉鬘にとって、内大臣の子は異母兄弟。鬚黒大将の子は先妻の子、いわゆる継子関係になる。＞とある。

やむごとなくまじらひ馴れたまへる御方々よりも（高貴な身分で宮仕えに馴染んだ他の部屋の帝妃たちよりも）、この御局の袖口（この尚侍のお部屋の見物女房たちの御簾の裾から覗かせている袖口の彩りは）、おほかたのけはひ今めかしう（どれもみな今流行の新しいもので）、同じものの色あひ（他の部屋の女房たちと、同じ色の組み合わせの）、襲なりなれど（重ね着なのだが）、ものよりことにはなやかなり（それらとは違って若々しい）。

*正身も女房たちも（尚侍自身も女房たちも）、かやうに御心やりて（このように雅な遊びに興じて）、しばしは過ぐいたまはまし（暫くは内裏暮らしを楽しんで過ごしたい）、と思ひあへり（と思い合っていました）。　*「しゃうじみ」は何度もノートするが重たい言葉だ。少なくも作者は、そういう響きを込めて語用している気がする。「そういう」とは、ただ＜本人自身＞というだけではなく、その人の自覚として＜正味の自分＝自分の客観的な立ち位置を悟る＞を意味する、ということだ。いや勿論、「客観的な立ち位置を悟る」と言っても、つまりは主観なワケで、それが真に客観的に正しいかどうかは証明のしようもなく、また主観である以上は客観的に正しいかどうかは他者にとって意味もないが、親離れをして一人立ちする個人がそれなりの知見を踏

まえて自分に課する覚悟なので、本人にとっては決定的に重要な認識ではありそうだ。正誤はともかく私にも、ああ、そうか、これが自分の人生なのか、と実感した覚えは何度かある。だから、「あはれ」にも通じる。

皆同じごと(何処でも同じように)、かづけわたす綿のさまも(踏歌の人々に褒美として被ける真綿の色形も)、匂ひ香ことにらうらうじうしないたまひて(艶出し加工を特に加えていらっしゃって)、こなたは水駅なりけれど(この承香殿東表は水飲み休憩所に過ぎないのだが)、けはひにぎははしく(舞人たちに大評判で賑わって)、*人びと心懸想しそして(女房たちはその応対に間誤付いていて)、*限りある御饗などのことども(最上級の御馳走にも)、もしたるさま(匹敵するほどの料理物類を)、ことに用意ありてなむ(特に用意してあるという歓待騒ぎは)、大将殿せさせたまへりける(大将殿の肝いりなのでした)。　*「人びと」は＜踏歌隊＞なのか＜接待女房＞なのか分かり難い。「こころげさう」は「心化粧」ともあり＜心の身繕い・身構え・緊張＞。「そす」は＜動詞の下に付けて、その動作を度を過ごしてする、熱心にする、意を表す接尾語＞と古語辞典にある。「こころげさうしそす」で＜緊張しすぎる→上がって平静さを欠く＞だろうから＜集団で酔った踏歌隊＞よりは＜予想以上に大勢に押し掛けられて行事馴れしていない女房たち＞が「人びと」なのだろう。 *「限りある」は＜一定限度がある＞というように訳文にあるが＜最大限の、最上の＞と解したい。「御饗(みあるじ)」は＜御馳走＞。また、渋谷校訂は「ことどもも、したるさま」とあるが、それでは意味が取れないので、「ことども、模したるさま(似ている状態、匹敵する様子)」としたい。訳文とはだいぶ違った解釈なのでド素人の無茶な強引さかとも思うが、私には渋谷・与謝野両訳文が意味の通る日本語になっているとは到底思えない。早い話が、まだコッチの方がマシだ。

[第三段　玉鬘の宮中生活]

*宿直所にゐたまひて(大将はその日は内裏西門である陰明門にある右大将詰所の殿居所にいらっしゃって)、*日一日(一日中)、聞こえ暮らしたまふことは(承香殿東表の尚侍に遣いを出して申し入れなさることには)、　*「とのゐどころ」は注に＜鬚黒が宿直所（陰明門内南廊、右大将直廬）に。＞とある。「直廬(ちょくろ)」は＜内裏(だいり)にあって、摂関・大臣・大納言などが、宿直・休息する所。じきろ。＞と大辞泉にある。御所内の具体的な官舎の配置図表は公文書として残っているのだろう。その文書名が注釈に記されていると注釈の説得力が上がるだろうに。　*「ひひとひ」は注に＜踏歌の翌日。一日中、鬚黒は玉鬘に何かと話し掛けなさる内容は。＞とある。「翌日」と言っても、既に「夜明けぬ」とあったので此処で言うなら＜その日は＞であり、それは文頭に補語した。

「*夜さり(今宵の内に)、まかでさせたてまつりてむ(退出して頂きたい)。かかるついでにと(折角の内裏暮らしだからと)、*思し移るらむ御宮仕へなむ(長居なさろうとの、御心変わりがあっての御宮仕えでは)、やすからぬ(あなたが他の男の目に曝されるので、安心できません)」　*「よさり」は「夜然り・夜去り」で＜夜になった時分。宵＞という名詞らしいが、「さり」を「然る・去る」の連用形と見て、下に「なれば」の付いた「夜然りなれば(夜になったら、今宵に)」という言い方の日常的短縮慣例による定句化のような語感でもある。現に、此処の言い方は＜夜になったら＞と訳文が当てられていて、その言い換えが分かり易い。*「おぼしうつるらむ」は＜御心変わりなさっての＞という言い方だろうが、その「心変わり」の中身は何なのか。大将殿は社交界デビューとなる尚侍の出仕を本来は警戒して嫌がっていた。しかし、それを口実に六条院から尚侍をいったんは内裏に参上させて置いて、その後間も無く自邸に引き取るという手筈を考え付いて、自邸の改修に取り掛かり、其れが為に正妻の怒りを買い、灰被りとなる羽目になり、正妻ばかりか愛娘との別居という事態に追い込まれたが、それでも尚侍自身の魅力の大きさに全てを許して、勿論もとよりの帝の御意向もあり、両大臣、特に内大

臣、の勧めも有って、今回の出仕を認めた。従って、自宅の改修ばかりか、参内の支度に相当な費用も掛かり、加えて今の踏歌隊の接待にも散財した。大将は、もう尚侍を自宅に引き取るに十分な費用負担は果たしたと自負している。その気持ちが「夜然り退出させ奉りてむ」と言わせる。が、当の尚侍は、大将の費用負担など頼んだ覚えは無く、大将が自分勝手にしているだけだ、と思っている。何より、御所暮らしが楽しそうに思えている。「心変わり」も何も、確かに結婚はしてしまったのだから、出仕は一時的なものだとは覚悟しているが、何日間とか、何時までとか、具体的な話はもともと決まっていない。増して、この数日間限りとは、それでは余りにも大将の了見は狭すぎる。参内の費用負担は大将だけがしたのではない。両大臣も負担したのだ。費用の事だけで言えば、源氏殿は二年間姫を西の対に住まわせて世話をした。マ、それはそれで源氏殿の勝手でもあるが、実の父親である内大臣の、娘に雅な暮らしを堪能させたい、娘の人生を豊かに彩りたい、という親心くらいは汲む度量がないと、それこそ先が思い遣られる。いや私など、こんな公卿らの先を思い遣るほど余裕のある身分では到底あろう筈も無いし、心配しなくても藤原氏の天下はさらに続いた。

とのみ(とだけ)、同じことを責めきこえたまへど(同じことを何度も要請申しなさったが)、御返りなし(御返事はない)。さぶらふ人びとぞ(尚侍付きの女房たちまでも)、

「*大臣の(源氏大臣が)、『*心あわたたしきほどならで(仮出仕だからという御客様気分ではなく)、*まれまれの御参りなれば(たまたま実現した御宮仕えなので)、*御心ゆかせたまふばかり*許されありてを(帝にお目見え頂く許可があるのだから)、まかでさせたまへ(それだけのお勤めを果たしてから、退出なされませ)』と、聞こえさせたまひしかば(尚侍にお話し申していらっしゃったので)、今宵は(今夜中の退出とは)、あまり*すがすがしうや(余りに性急な)」　*「おとどの」は注に＜以下「すがすがしうや」まで、女房の詞。「大臣」は源氏をさしていう。「心あわたたしき」以下「まかでさせたまへ」まで、源氏の詞を引用。＞とある。尚侍の女房は、特に側仕えは、六条院からの継続に違いない。*「心あわたたしき」の「心」は＜尚侍の心構え＞。この出仕が一時的なものだということは、大将は勿論、本人も当然、両大臣は許より、何より帝が其の事情を承知の上でお許しなされた、という事の運びでなければ実現していない。その上で「あわたたしきほどなり」ということは＜一時的な出仕だからという慌しさ＞を意味し、それを打消して下に続ける接続助詞の「で(ずて)」が付いている文意は＜物見遊山の遊び気分ではなく＞だ。　*「まれまれ」は＜ごく稀な、たまたま、珍しく＞とあるが、経緯からすれば＜思わしくない事情が有った上で、それでも特に帝のお許しが珍しく有った＞のだから、普通なら＜勿体無い、有難い＞とでも言いそうなものを、源氏殿は自分が取り計らったという自負からか、幾分帝に近付いたかの立場で、あえて＜たまたま＞の行き掛かりでそうなった、みたいな帝なら謙遜になっても臣下なら非常に尊大になる、という物言いをしている。尤も、庶民が帝や諸侯や自分たちの存在までも含めて尚侍の参内を＜たまたまだ＞と思うのは尊大では無く、関係ないという意味だが、此処では別の話だ。ということを踏まえた上で、この「まれまれ」は、あえて＜折角＞でも＜勿体無く＞でもなく＜たまたま、実現した＞と言い換える。　*「みこころ」は＜天皇のお気持ち＞。　*「許され」は＜許可＞という名詞。その中身が「御心ゆかせたまふばかり(帝が御満足あそばすまで→帝にお目見え頂いて尚侍という人物を御認識頂き一連の事情を御納得頂く)」だから、この「許され」は＜滞在許可＞というより＜接見許可および滞留措置＞の「御心」だ。　*「すがすがし」は＜さっぱりしている＞だが、これは大将殿に遠慮した言い方で、帝の意向まで持ち出したのだから実意は「すくすくし(良く言えば実直、悪く言えば自分本位で周囲への思い遣りが無い→狭量だ)」だろう。で、中を取って、というか文意に沿った語感から＜性急な＞とした。

と*聞こえたるを(と話してまともに取り合わないでいる事を遣いの者から伝え聞いて)、いとつらしと思ひて(大将殿は全く心外に思って)、　*「聞こえたる」は「さぶらふ人びとぞ聞こえたる」という

強調文だから、尚侍自身が返事を出さないばかりか＜「さぶらふ人びと」までも人に聞こえるように悪口を言っている＞という言い方なので、女房が尚侍に代わって殿に返答申し上げたのではなく、殿ったらＫＹネ、と女房たちが言っていたのを遣いの者が殿に報告した、ということだ。

「*さばかり聞こえしものを(仮の出仕だと申して置いたものを)、さも心にかなはぬ*世かな(やはりそうは行かない雲行きのようだ)」　*「さばかり聞こゆ」は＜(退出を)ちょっと申してみただけ＞と＜(出仕を)ちょっとだけだと申す＞のどちらとも取れる言い方だろうが、「聞こえし(申して置いた)」とあるのだから、今日言い出した＜退出＞ではなく、予め言ってあった＜一時的な出仕＞のことだ。　*「世」は＜夫婦仲＞ではなく＜全体の流れ、空気、雲行き＞だ。

とうち嘆きてゐたまへり(と溜息を吐いていらっしゃいました)。

兵部卿宮(ところで、兵部卿宮は)、御前の(ごぜんの、帝がなさる)*御遊びにさぶらひたまひて(踏歌記念の音楽会に参加なさっていても)、静心なく(落ち着かなく)、この御局のあたり思ひやられたまへば(尚侍が内裏内の御局に居るという近さが気になっていらっしゃったので)、念じあまりて聞こえたまへり(思い余って手紙を差し上げなさいました)。大将は*司の御曹司にぞおはしける(それはちょうど、大将が殿居所から尚侍に早退督促を続けてらっしゃったという時でしたので)、「*これより(またです)」とて取り入れたれば(と女房が宮のお手紙を殿のお手紙と勘違いして取り次いだので)、しぶしぶに見たまふ(尚侍君はしぶしぶ御覧になります)。　*「おほんあそび」は＜管弦の遊び＝音楽会＞だが、初音巻第三章第二段にも踏歌の後の後宴を源氏殿が六条院で御方々を一同に会して行ったという記事が在ったが、その開催は早く見ても朝寝をした後の昼過ぎのことで、夕方近かったのかも知れない。大将は徹夜明けのまま、尚侍に退出勧告を出し続けていたのだろうか。話の順序からすると、大将から宮への話題転換の間にそれなりの時間の経過が意図されているような気もするが、踏歌の終了から後宴への流れの実体がさっぱり分からない私には、その明示が欲しかった。　*「つかさのみざうし」は右近衛府大将専用室だから、殿居所をわざと表向きの言い方にしたものだ。ということは、此処の言い回しは語り手が少し大袈裟に芝居がかって、大将の督促を揶揄しているのだろう。「おはしける」は＜いらっしゃったのでした＞と不都合に気が付いたかの言い方だ。さらに、強調の係助詞「ぞ」で文意を下に続けるので、「ぞおはしける」は＜いらっしゃったという時でしたので＞だ。　*「これ」は話題のものを指す指示代名詞なので、手紙が来たとなると、度重なる大将殿からの督促が＜また来た＞と取次ぎ女房は勘違いしたのだろう。

「深山木に羽うち交はしゐる鳥の、またなくねたき春にもあるかな　(和歌 31-10)

「遠く見る 春の夫婦の 睦まじさ　(意訳 31-10)

*注に＜蛍兵部卿宮からの贈歌。鬚黒を「深山木」に見立て、玉鬘を「鳥」に見立てる。「深山木」は無風流な木の譬えである。「またなくねたき」には「またなく妬き」に「また鳴く音」「また泣く声」を響かせる。「羽うち交はし」は「長恨歌」の比翼連理を踏まえた夫婦仲の睦まじいことをいう。楽しいはずの春が自分には悔しい思いでいる。＞とある。「みやまぎ」を「深山木(山深い粗野な木)」と恨む気持ちはあるのだろうが、「美山木(遠くにある手の届かない美しい木)」と讃えてこそ、この歌の残念な味わいが滲む気がする。

*さへづる声も耳とどめられてなむ(さえずり合う声も耳につきます)」　*「さへづる声」は注に＜

蛍兵部卿宮の歌に添えた詞。『源氏釈』は「百千鳥囀る春はものごとに改まれども我ぞふりゆく」（古今集春上、二八、読人しらず）を指摘。現行の注釈書でも指摘する。＞とある。この参照歌は何処かで既紹介されていたんじゃないかな。「百千鳥（ももちどり）」は＜いろいろな鳥＞とも＜ウグイスの異名＞ともある。「囀る春はものごとに改まれども」は＜高い声で鳴いて勢いを知らせる春という季節は何もかも新しくなるが＞。「我ぞふりゆく」は「我ぞ古り行く（私だけは老いて行く）」。疎外感か。寂寥感か。達観か。兵部卿宮らしい、かな。

とあり（と手紙にはあります）。いとほしう（尚侍は宮が思わず愛しく）、面赤みて（おもあかみて）、聞こえむかたなく思ひゐたまへるに（お返事に困っていらっしゃるところに）、*主上渡らせたまふ（帝がお越しあそばします）。　*「うへ」という言い方は、邸内でその家の主人を「殿」という言い方に似て、御所とくに内裏内で内側の視点で帝を表す語なのだろう。

［第四段　帝、玉鬘のもとを訪う］

*月の明かきに（月が明るいので）、御容貌はいふよしなくきよらにて（帝の御顔立ちは言いようもなく美しく映えて）、ただ（他ならぬ）、かの大臣の御けはひに違ふところなくおはします（源氏大臣の御姿そっくりでいらっしゃいます）。　*「つきのあかきに」とあるのは、もう夜の場面だ。踏歌は十四夜で、今はその翌日の夜だから一月十五夜満月だ。

「*かかる人はまたもおはしけり（こういう人が他にもいらっしゃったんだ）」と、見たてまつりたまふ（尚侍は帝を拝し奉りなさいます）。　*「かかる人はまたもおはしけり」は「かかる人はまたも（や）おはすらむ（こういう人は他にはいらっしゃらないだろう）」という予測認識が事前に在って、それが違ったという存外の驚きを示す言い方、かと思う。「またも」の「も」は「や」が付かなくても反語表現に成りそうだ。ただ、帝に対する言い方としては尚侍君は源氏大臣の方を優位と認識しているかの印象だが、帝と源氏殿が親子だというのは論外として、源氏殿が帝の兄宮に当たる血縁関係という点に於いても、臣下の礼を崩さないことが国体の護持そのものだろうに、建前の男社会とは違って内裏内も六条院内も同じ家庭内という事なのか、いや直接に男と女が向き合って気持ちを確かめ合う、その場こそが現実の全てと認識する女ならではの感性か、まぁ是は尚侍の内心文だし、それだけに生の声らしさを表してはいるのかも知れない。

「*かの御心ばへは浅からぬも（源氏大臣の私への御関心は浅くはなかったが）、うたてもの思ひ加はりしを（養父の立場が邪魔に思えもしたものを）、*これは（帝の方は）、などかはさしも*おぼえさせたまはむ（なにもそのように拒む要素などお有り為さろう筈も無い）。」　*「かの御心ばへ～おぼえさせたまはむ」までは尚侍の内心文なのだろう。「かのみこころばへ」は＜源氏殿の御意向＞だが、是を＜私への御関心＞の意味で言っている。　*帝を「これ」と言えるのは内心文ならではだ。　*「おぼゆ」は「覚ゆ」で、他動詞の＜（帝が何かを）思い出す＞のではなく、自動詞の＜（帝自身が傍目に）そう見える、似ている＞の意だ。「さす」は尊敬の助動詞で「おぼえさす」は＜似ていらっしゃる＞。「たまふ」は二重敬語の補助動詞で「おぼえさせたまふ」は＜似て御出ででいらっしゃる＞。「む」は推量の助動詞。では、帝は源氏殿の何に似ていないのかと言えば、養父の立場で懸想するという「うたて（ウッと思わず手を立てて拒否してしまう）」ある事情が、無い事だ。

いとなつかしげに（それで屈託なく、全くありのままに）、思ひしことの違ひにたる怨みをのたまはするに（新しい遊び相手が来ると楽しみにしていたのに、その相手が先に他人と結婚してしまうという期待外れを残念だと仰る帝に）、面おかむかたなくぞおぼえたまふや（尚侍は顔向けで

きたものではないと御思いになったのか)、顔をもて隠して(うつむいたままで)、御応へもえ聞こえたまはねば(お返事も申し上げなさらないので)、

「あやしうおぼつかなき*わざかな(どうも良く分からない人ですねえ)。*よろこびなども(尚侍としての出仕を喜ばしく)、思ひ知りたまはむと思ふことあるを(思って頂けるものと思っていたのですが)、聞き入れたまはぬさまにのみあるは(お聞き入れ下さらないようにばかりで有ったのは)、かかる御癖なり*けり(こういう御性格からでしたか)」　*「わざ」は＜事態、事柄＞。此処では＜人柄、性格＞くらいの意味だろうか。つまりは、話し相手その人のことを言っている訳で、こういう言い方を帝はする、ということだろう。　*「よろこび」は＜叙位の喜び。＞と注にある。ただ、具体的には叙位式ではなく参内式だったのであり、尚侍として内裏住まいを許された事それ自体、だったのだろう。　*「けり」は事態判明を納得した言い方の助動詞。

とのたまはせて(と仰せられて)、

「などてかく灰あひがたき紫を、心に深く思ひそめけむ　(和歌 31-11)

「見初めても 馴染まないとは 小群ら咲き　(意訳 31-11)

*注に＜帝の贈歌。「紫」は三位の服色。玉鬘を三位に叙したことをいう。また紫は椿の灰を混ぜて染料を作る。「灰合ひ」に「逢ひ」を掛け、「深く」「染め」は「紫」の縁語。＞とある。「三位」以上はそれ以下の官位とは別格の高級貴族を意味し、国の中枢を占める特別な存在であったらしい。というか、普通は女官に叙位自体が無かったらしい。女は夫や親の身分が其の身分となる。ただ、内侍所は内裏の家政業務に止まらず、御所表との連絡係とは即ち帝名代の役割をも担ったので、その総取締役たる尚侍にはそれ自体に高位身分が必要だったのかも知れない。それにしても「三位」とは、夫の右大将と同位という物凄い高位であって、従一位か正二位であろう源大臣や藤大臣の縁者ならでは処遇には違いなく、尚侍がそういう官職であったことが改めて思われる。「こむらさき」に「こにくらし」を母音の近似で掛けた。近似なので親父ギャグには成らずに済んだ。マ、こうしてネタバレっぽく言い訳している時点で十分臭い、とは思いつつ。

*濃くなり果つまじきにや(これ以上は深い縁には為れず終いかな)」　*「濃し」は注に＜これ以上深い関係にはなれないのでしょうかの意。「濃く」は「紫」の縁語。会話文の中にも縁語を使う。ここまで、主上の歌に添えた詞。＞とある。

と仰せらるるさま(と仰せになる帝が)、いと若くきよらに*恥づかしきを(とても溌剌と美しく尚侍君は自分が変に気を回すことこそが恥ずかしく思えるほど率直な御様子なので)、「*違ひたまへるところやある(帝は計算高い源氏殿とは違って、素直な方に違い無い)」と思ひ慰めて(と気を取り直して)、聞こえたまふ(お返事なさいます)。　*「恥づかし」は何度もノートする。基本的に現代語と同じで、自分が＜恥ずかしい、恐縮する＞という意味の形容詞だ。が、古語の場合、その人を見た他人が＜恐縮するほど其の人が立派だ＞という意味でも多用される。そして此処では「恥づかしき」という連体形で「(仰せらるる)さま」に掛かる語用なので、帝の＜立派な御様子＞を意味する。が、どのように「立派」なのかは、さっぱり分からない。と、その手掛かりが次の＜「違ひたまへるところやある」と思ひ慰め＞たことに在りそうだ。　*「違ひたまへるところやある」の「や」は「ある」の連体形で文を結ぶ係り結び文型だ。が、是は反語や疑問句ではない。形の上で「やは」ではない、ということなどではない。尚侍は、帝が自分のことを妃にし損なったと恨めしそうに言って

きたことに、返事をしなかった。帝が自分を好色な目で見ることに支障のない立場である事は、尚侍も承知している。返事をしないのは、期待を裏切って申し訳ないので合わす顔がないからと言ってはいるが、それを言い出したら、端から今さらのこのこと出仕出来た義理ではない。誰に何を言われても、帝に相済まないと思えば固辞できる。でも、はっきり言って、興味本位で参内した。当然だ。そんな立場に生まれついた者は、それ自体が天命だし、だから抗えない冥利だ。要するに尚侍君は帝の人となりが掴み切れていないから、帝の本心が量りかねて、下手な事は言えないと警戒していたのだ。それと言うのも、帝に良く似た源氏殿が養父のクセに悪戯し放題で、散々悩まされてきたからだ。帝も、もしかしたら、大将の嫁と承知の上で、尚侍が立場上困ることも顧みずに、無理難題を仕掛けてくるかも知れない。それが運命だとしても、もう面倒は厭だ。尚侍は帝を観察していたのだ。そして、何かを発見した。「や」は元々何かに気付いた時の感嘆詞だ。それが、疑問点や相違点に気付いた時に疑問文や反論文になる。此処では、その気付きをそのまま驚きを持って言っているのだ。「たがひたまへるところやある」は＜あら帝って、源爺と違っていらっしゃる所があるんじゃん）＞と尚侍は思った。その「違う所」とは＜源氏殿と違って計算高くない所→素直な所＞だ。其の判断の正誤はどうでも良い。尚侍がそう思った、ということが肝心だ。従って後付けになるが、「恥づかし」は＜自分が変に気を回すことが恥ずかしく思えるほどの帝の率直さ＞だ。

*宮仕への労もなくて(昨年十月の尚侍就任以来、年内は六条院に留まり宮仕えもしなかったのに)、今年(今年になって参内した時に)、加階したまへる心にや(帝が叙位して下さった御気持への謝辞だろうか、)。　*「宮仕への労もなくて」の事情は是うだ。尚侍の君は、その就任は昨年の八月に源氏殿が十月と決めて、内裏も承認した。ということは、正式の人事決定であり、その時点で出仕の宣旨が帝から尚侍の君に出ていた訳だ。そして、正に其の間隙を縫って、九月に右大将が狼藉まがいに対の姫を落とした。そして、それが成婚に至る諸般への根回しも右大将は抜け目無く遣り果せていた。で、御所での社交界勤めとなる尚侍の出仕を嫌った夫の大将に気兼ねして、十月になって対の姫は尚侍に就任したというのに、御所へは出仕せずに六条院夏の町の西の対で尚侍の仕事を務めた。その為に御所の内侍所から女官たちが尚侍の決裁を求めて六条院通いをして、十一月の催事時期は大騒ぎだったという記事が本巻第一章第三段にあった。しかし年が明けて、大将は尚侍を自邸に引き取るためにも、帝への挨拶は勿論のこと、両大臣の意向を汲む意味でも、また諸般の異論を封じる為に朝廷の威光を借りる意味でも、尚侍の君が一時的に六条院から内裏に移り、その後に右大将家に迎える形が望ましそうだと、出仕を許して今に至る、という次第だ。

「いかならむ色とも知らぬ紫を、心してこそ人は染めけれ　(和歌 31-12)

「紫が　見染めた色とも　知らないで　(意訳 31-12)

今よりなむ思ひたまへ知るべき(今からは其の御厚情を有難く存じます)」

と聞こえたまへば(と尚侍がご返歌申し上げなさると)、うち笑みて(帝はにっこり笑って)、

「その、今より*染めたまはむこそ(今からって所が)、かひなかべいことなれ(手遅れなんじゃないか)。*愁ふべき人あらば(僕たち二人の言い分を相談できる裁判官がいるなら)、ことわり聞かまほしくなむ(どっちが正しいか聞きたいもんだよ)」　*「そむ」については、注に＜「そめ」は「初め」と「染め」とを掛け、「染め」は「紫」の縁語。＞とある。　*「うれふべきひとあらば」は注に＜私の愁えを聞いてくださる人がいたら。＞とある。「愁ふ」は＜悲嘆する＞でもあるが＜嘆きを訴える、悩みを相談する＞でもあるらしい。「べし」は規範・妥当を示す助動詞なので、相談事を業務にするという意味で、御所での語用では「愁ふべ

き人」は＜裁判官＞なのだろう。色恋沙汰を、それに伴う資産帰属の問題ではなく其自体の感情を、行政判断に任せる愚を言っているのだから、是は冗談だ。で、それが尚侍に通じるかどうかが、帝の関心事だ。

と、いたう怨みさせたまふ御けしきの(たいそう恨みあそばす帝の御様子が)、*まめやかにわづらはしければ(色事に精を出しそうなのが懸念されて)、「いとうたてもあるかな(相当に無理強いされることもあるのかな)」とおぼえて(と尚侍には思えたので)、「*をかしきさまをも見えたてまつらじ(下手に調子など決して合わし申すまい)、むつかしき*世の癖なりけり(始末の悪い男の性癖だこと)」と思ふに(と考えて)、*まめだちてさぶらひたまへば(色っぽい冗談など分からないかのように、真面目な堅物ぶって何も言わずに控えていらっしゃったので)、え思すさまなる乱れごともうち出でさせたまはで(帝はそれ以上は思うような戯言も続け為さることがお出来にならず)、「やうやうこそは目馴れめ(その内にもっと親しくなれるだろう)」と思しけり(と御思いになったのです)。　*「まめ」は＜真面目な堅物＞ではなく＜マメ男のマメ＞で、源氏殿よろしく帝も＜好き者＞だと尚侍は思った、ということだ。尚侍は帝の冗談が、勿論分かっている。で、それが、恋遊びの誘い水だということも、当然分かっている。本来は、藤原姫の血筋なので、奔放に遊びたい。その素質も素養もある。でも、既に右大将の人妻だ。遊びたいけど、面倒な遊びは楽しくない。多分、この人は無責任な生き方は意味が無いという、私から見て好ましい価値観の持ち主、かと思う。好ましい、というのは、個人が社会的責任の全てを果たせるものでも果たすべきものでも無いという世の不条理を認識した上で、それでも自分は他者に対して誠実でいようという姿勢でいるのが、魅力のある人ほど大変そうだと思う気持ち。　*「をかしきさま」は＜楽しい時←帝の誘いに乗って恋遊びに興じる＞。　*「よのくせ」は注に＜男女の仲、特に男性の悪い性分の意。＞とある。源氏殿とは違うと思ったけど、やっぱり帝も男よね、みたいな。　*この「まめ」は＜真面目な堅物＞。

[第五段　玉鬘、帝と和歌を詠み交す]

大将は(だいしゃうは)、かく渡らせたまへるを聞きたまひて(帝がこのように尚侍のお部屋にお渡りあそばしたのをお聞きになって)、いとど静心なければ(ますます気が気ではなくなって)、急ぎまどはしたまふ(退出の支度を慌しく急がせなさいます)。みづからも(尚侍の君自らも)、「似げなきことも出で来ぬべき身なりけり(このまま内裏に留まれば帝からお誘いを断りきれずに、不都合な立場になってしまう運命のようだ)」と心憂きに(と懸念されて)、えのどめたまはず(これ以上は滞在を延ばせません)。

まかでさせたまふべきさま(大将は尚侍の君を退出させなさる段取りや)、*つきづきしきことづけども作り出でて(尤もらしい退出願いの書類を調えて)、父大臣など(岳父に当たる内大臣などに)、かしこくたばかりたまひてなむ(口添えしてもらえるように、上手く根回しなさったことで)、御暇許されたまひける(帝から御いとまを許されなさいました)。　*「つきづきしきことづけども」は＜いかにもそれらしい申請書類＞というだけで、中身がさっぱり分からない。そんなに簡単に許可が出るような在り来たりの場面でも無いだろうに随分説得力に欠ける、と思っていたら、次の段に「やがて今宵」と改めてこの時の大将の様子が記されていた。此処を読んだ時点では、どんな言い訳をしたのか、正攻法で当たったのか、と疑問に思い、その解が無いことに不満を感じたものだ。

「さらば(もし退出を許可せずに)、物懲りして(これに懲りて)、また出だし立てぬ人もぞある(二度と家人を女官として出仕させなくなる人が出れば)、いとこそからけれ(それこそ困るから

ね)。人より先に進みにし心ざしの(人より先に目を付けたものの)、人に後れて(その女を娶るのは人に後れて)、けしき取り従ふよ(今ではその人の機嫌を取るという体たらくだ)。*昔のなにがしが例も(昔の誰それの例でも)、引き出でつべき心地なむする(持ち出したい気分だよ)」　*「昔のなにがしが例」は注に＜「大納言国経の朝臣の家にはべりける女に、平定文いとしのびて語らひはべりて、行末まで契りはべりけるころ、この女にはかに贈太政大臣にむかへられてわたりはべりにければ、文だにも通はすかたなくなりにければ、かの女の子の五ばかりなるが、本院の西の対に遊びありきけるを呼び寄せて、母に見せたてまつれとて腕にかきつけはべりける、平定文　昔せしわがかねごとの悲しきはいかに契りし名残なるらむ。　返し、読人しらず　うつつにて誰契りけむ定めなき夢路にまどふ我は我かは」（後撰集恋三、七一一、平定文・七一二、読人しらず）の話が指摘されている。＞とある。平定文(貞文、たいらのさだふむ)は「千人万首」サイト他の人物説明によると醍醐天皇期(897-927)を生きた中級貴族にして歌人だったらしい。大納言国経とは藤原国経(ふじわらのくにつね)で、贈太政大臣とは時の左大臣藤原時平(ふじわらのときひら)とのこと。で、この話題の女と時平との間に出来た子の敦忠(あつただ)が 906 年生まれのようなので、その辺りの事なのだろう。国経は 908 年に 81 歳で没したらしいので、900 年当時でも 70 歳を過ぎている。「家にはべりける女」がどういう存在だったのか分からないが、仮に妻だとしても定文や時平と遊ぶのを愉しく眺めていたとしても、有り得ない話ではない。また、時平も 909 年に 39 歳の若さで亡くなった。それでも、「かの女の子の五ばかりなる」は定文の「かねごと(予言、将来を約束した)」の「名残(証し)」となる子だろうし、その子が女と同居していたとなると国経ばかりか、時平の態度というか思惑みたいなものが、どういうことだったのか不思議に思えるし、それを定文や女が如何思っていたのか、定文が女に逢えない事を「悲しき」と思っていたこととは別の、現実の生活問題として納得していたのか、諦めていたのか、義憤を抱えていたのか、は分からない。ただ、定文自身は桓武天皇の血を引きながらも財政不足から臣籍降下に追い込まれた身の上らしく、王家血筋に憧れようも無く、帝こそ国体保持の為に祭り上げられて国家財政で後宮ごと面倒を見てもらえるが、天皇家自体の天領経営は代行の美名の下に藤原氏に実権を奪われ、自主開発が適わずにジリ貧状態に置かれている事を身をもって思い知らされている。文化面で尊敬される他に体面を保つ生き方は出来そうもない。で、出世に意欲も持てず歌人として遊び暮らす。意欲があるなら関東に下って自主開発に勤しんだだろうから、没落貴族に有り勝ちな皮肉屋か、本気で遊びに没頭したか、恐らくその中間を彷徨って悩んだのだろう。というのは、定文は「平中物語」という歌物語の主人公に見立てられているらしいので、そういう悩み、というか、執着心が無ければ歌も生まれなかっただろうから。そして、この女はよほど美形だったのか、罪深いような気もするが、本人が「我は我かは」と言うように、有力者に翻弄される自分の人生が＜自分でも何が本当か分からない＞というのは実感だったかも知れない。

とて、まことにいと口惜しと思し召したり(本当にとても悔しくお思いあそばしました)。

聞こし召ししにも(お聞きあそばしていたよりも)、こよなき近まさりを(実際に会った方がはるかに美しかった尚侍の君を)、はじめよりさる御心なからむにてだにも(はじめは大将の妻だからと妃にする御積もりが無かったとしても)、御覧じ過ぐすまじきを(そうは見過ごせなくお成りで)、まいていとねたう(帝は大将への嫉妬が増して)、飽かず思さる(諦め切れなく御思いになります)。

されど(それでも)、*ひたぶるに浅き方に(その劣情のままに自制心がない者と)、思ひ疎まれじとて(尚侍の君に疎ましく思われたくなくて)、いみじう心深きさまにのたまひ*契りて(本当に名残惜しいと別れの言葉を色々と仰って)、なつけたまふも(帝が親しく為さるのも)、*かたじけ

なう(勿体無いものの)、「*われは、われ、と思ふものを(結局あなた次第なのに)」と思す(と尚侍の君は御思いになります)。　*「ひたぶる」は＜無性に何かに駆り立てられているさま→劣情のまま＞。「浅き方」は＜考えの浅い人→自制心の無い人＞。　*「ちぎる」は「契る(約束する)」ではなくて「千切る(細かく切る→色々と言う→別れを惜しむ)」だろう。　*「かたじけなう」の「う」音便は「(かたじけな)くて」を意味するのだろうが、その接続助詞の「て」は下の文意からして逆接と思われる。　*「我は我」は帝が先に持ち出した「昔のなにがしが例」にあった、女の返歌の「うつつにて誰契りけむ定めなき夢路にまどふ我は我かは」の末節だが、是を言う意図は其の末節語句自体ではなく歌意総体だろう。「たれちぎりけむ」は＜誰と将来を誓ったんだっけ＞という惚けたというか、不遜戯た物言いだが、それが止むを得ないほどの圧倒的な有力者が今の相手の男だから、説得力があるワケだ。「我か」は「此処は何処？私は誰？」と正体を失った言い方で、女は結局あなた任せなんだから、と尚侍は帝に全てを託してみたいと思ったのだろう。いくら有力者の大将が相手と言えども、帝に敵う筈はない。だからこそ、大将はこれほど焦ったのだ。

*御輦車寄せて(みてぐるまよせて、東表に手引車を寄せて)、こなた(お見送りと)、かなたの(お迎えとで)、御かしづき人ども心もとながり(尚侍に付き従う者たちが落ち着きなく出立ちの時を待ち)、大将も(夫の大将も)、いとものむつかしうたち添ひ(気難しそうに立ち会って)、*騒ぎたまふまで(出発の合図を為さるまで)、えおはしまし離れず(帝は階の間にいらして尚侍の君からお離れなさいません)。　*「てぐるま」は「手車」で＜車を牛ではなく人が手で引くもの＞とのこと。承香殿の東表に階があったのだろうか。帝が「えおはしまし離れず」だから、わざわざどこかの玄関先まで出向いているには違いない。であれば、やはり承香殿か。注には＜御輦車は、女性では女御、妃などのうち、特に帝の勅許を得て許された者が乗用する。したがって、帝の玉鬘に対する特別な措置といえる。＞とある。　*「騒ぐ」は＜騒動が起こる→行列が出発する時の騒ぎが起こる→出発の合図をする＞なのだろう。

「かういと厳しき*近き守りこそむつかしけれ(此処まで厳重な身辺警護とは私を牽制しているようだ)」と憎ませたまふ(と帝は近衛大将に嫌味を仰います)。　*「近き守り」は「近衛」の役所名であると共に＜身辺警護＞のことでもある。「むつかし」は本来＜むつかりがまし→不快だ＞だが、近衛は煙たがられてナンボなので、人を＜むつから＞すのが業務だ。しかし、それは帝の安全を確保する為の警戒であって、帝を威圧しては本末転倒だ。だから是は、帝にして近衛大将に対してならではの嫌味だ。

「九重に霞隔てば梅の花、ただ香ばかりも匂ひ来じとや」(和歌 31-13)

「遠く離れる梅の花、せめて名残を惜しみたい」(意訳 31-13)

*注に＜帝の玉鬘への贈歌。別れの挨拶といった内容。「九重」は宮中の意と九重、すなわち幾重にもの意を掛ける。また「かはかり」にも「香はかり」と副詞の「かばかり」とを掛ける。「霞」に暗に鬚黒のことをいう。「梅の花」は玉鬘を譬喩する。＞とある。「香」は承香殿を意味しているのだろうか。ところで、「梅の花」とあると、私のような者でも菅原道真が詠んだとされる「東風吹かばにほひをこせよ梅花　主なしとて春を忘るな」が想起される。というか、それ以外に「梅の花」を持ち出す意味が分からない。道真の歌は「拾遺和歌集(1005～1007 年頃成立)」の 1006 番に「流され侍りける時、家の梅の花を見侍て　贈太政大臣」という詞書で掲載されているとのことで、遠く大宰府から都を思う、という趣きらしい。当歌も、遠く離れて思う、という事では似ているようだが、「匂い招こせ(勢いを伝えてくれ)」と「匂ひ来じ(勢いは伝わらないだろう)」とでは語調はだいぶ違う。ただ、道真は藤原時平に謀られて失脚したらしいので、帝はどこか自分を平定文に準えようとした節はあるのだろう。

殊なることなきことなれども(特に別れの言葉以外のものではなかったが)、御ありさま(帝の御姿や)、けはひを見たてまつるほどは(寂しげな御様子を拝し申し上げる尚侍には)、をかしくもやありけむ(趣きが感じられたのかもしれません)。

「*野をなつかしみ(客人のあなたと親しんで)、明かいつべき夜を(夜を明かしたい今宵だが)、*惜しむべかめる人も(大事なあなたを独占したい人の気持ちも)、*身をつみて心苦しうなむ(私には身に詰まされて分かるので引き止めるのは心苦しいのです)。いかでか聞こゆべき(どちらを申すべきでしょうか)」　*「野をなつかしみ明かいつべき夜」は注に＜「春の野に菫摘みにと来しわれぞ野をなつかしみ一夜寝にける」（古今六帖六、菫、三九一六・万葉集巻八、一四二四、山部赤人）の和歌の句を引用する。＞とある。「菫」は野草の「すみれ・スミレ」とのこと。「来し(こし)」は古語辞典に＜「来(く)」の未然形に過去の助動詞「き」の連体形が付いたもの＞と解説され、現代語での言い方は＜来ていた、～していた＞と説明されている。「我ぞ」の「ぞ」は＜意に反して＞または＜予定外に思わず＞という偶然性を強調する係助詞で、上に予定を掲げ下に予定外の結末を記す文型だ。だから「春の野」は文字通り＜春の野原＞だが、後の「野」は＜田舎＞であり＜その土地の女＞だ。そして、この「野」の性質を＜を～み(～を～と思って、～が～なので)＞という受身の格助詞で説明できる語用こそが、多分この歌の味わいだ。また、参照 Web サイトには「すみれ摘み」は＜薬草採りだ＞という説明があったりするが、前段が文字通り「すみれ摘み」を表すものであることは確かだから、私は其処辺の判断は遠慮する。というわけで、歌筋は＜春の野原にスミレ摘みに来ていた私だったが世話してくれた其処の女が余りにも可愛かったので一晩共寝しちゃいました＞と「ける」がお茶目だ。ところで、帝が言う「野」は、いくら尚侍が昔に筑紫に流れていたとは言え、大臣の娘を＜田舎の女＞という意味では使わないだろう。御所の外は「野」なので＜外から来た客＞ぐらいの意味だ。ただ、「あかいつべき」に＜本当は一晩共寝したい＞思いは滲ませる。　*「をしむ」は＜(大事なものを)排他的に独占したい、する＞。　*「身をつみて」は注に＜前出の和歌の語句「菫摘みに」に引っ掛けた表現。＞とある。「摘む」と「詰む」の洒落。あなたは魅力的だから、そんなあなたを大事に思う大将の気持ちは＜私も身に詰まされて分かる＞という言い方だ。

と思し悩むも(と逡巡なさる帝を)、「いとかたじけなし(何と勿体無い)」と、見たてまつる(尚侍の君は思い申し上げます)。

「香ばかりは風にもつてよ、花の枝に立ち並ぶべき匂ひなくとも」（和歌 31-14）

「せめて香りは伝えたい、たとえ野に咲くスミレでも」（意訳 31-14）

*「つて」は「伝て」で＜「伝ふ」(下二段)の未然・連用・命令形の「つたへ」の転。＞と古語辞典にある。「転」とは、人間の発音の物理的制約と音感上の語意認識が折り合った形、とは即ち＜音便＞なのだろう。「つてよ」は「伝へよ」で＜伝えなさい＞という命令ではなく＜伝えてよ(伝えるようにしてよ)＞という連用形だ。「してよ」は誰に頼むわけでも無い風任せだから＜願い＞だ。上句は＜せめてかばかりの香りだけは風に乗せて伝わりますように＞で、下句は＜とても御所の方々に立ち並べるような力は無くても＞。

さすがにかけ離れぬけはひを(さすがに内裏に未練がありそうな尚侍の君の様子を)、あはれと思しつつ(しみじみと感じ入りなさりつつ)、返り見がちにて渡らせたまひぬ(何度か見返すように為さりながら帝は承香殿から清涼殿にお帰りなさいました)。

［第六段　玉鬘、鬚黒邸に退出］

*やがて今宵（ところで大将は今夜中に）、かの殿にと思しまうけたるを（尚侍の君を自邸に引き取ろうと思って準備なさっていたものの）、かねては許されあるまじきにより（早々の退出ありきのこんな短期の出仕は、それが予定されていたものとしては許されるものではないので）、漏らしきこえたまはで（そうした本音は洩らし申しなさらず）、　*「やがて」は曲者だ。何度もノートしてきている。先に「弥勝ちて≒弥増して」のような解釈もしたが、それはそれで有効だとは思っているが、その他に是の「やがて」という語には独特の記号性がある、ともずっと前にノートした気がする。楽譜の反復記号のような考え方だが、ちょうど＜２番カッコ＞のように何処か前の記述部分の＜仮終始点＞まで戻って＜１番カッコ＞に代わって此処から先を読むべし、みたいな感じ。が、その＜仮終始点＞や＜１番カッコ＞は明示されていない。で、その＜仮終始点＞の目安が「やがて」という言い方が意味する＜その勢いのままに←其処を起点にして＞で語られる下文の内容だ。此処では「かの殿にと思しまうけたるを～（大将殿が尚侍の君を自邸に引き取ろうと予てからお考えになっていたことを～）」だから、それが繋がる基点を探すと、前段冒頭の「大将は、かく渡らせたまへるを聞きたまひて、いとど静心なければ、急ぎまどはしたまふ。」が見つかる。前段はそのまま帝と尚侍と別れの場面が語られたので、この「やがて」は＜ところで大将の方は＞という言い方になるのであって、つい＜そして＞や＜それで＞とその後の事と読んでしまうと混乱する。

「にはかにいと乱り風邪の悩ましきを（急にひどく風邪をこじらせまして）、心やすき所にうち休みはべらむほど（自宅療養いたしたく存じますが）、よそよそにてはいとおぼつかなくはべらむを（妻と離れていては気が休まりませんので）」

と、おいらかに申しないたまひて（方便を申し做しなさって）、*やがて渡したてまつりたまふ（そのまま尚侍の君を自邸にお移し申しなさいます）。　*この「やがて」は＜そのまま＞。

父大臣（君の実父の内大臣は）、にはかなるを（急な話なので）、「*儀式なきやうにや（厳しかった参内式に比して、余りにも簡素な退出ではないか）」と思せど（と御思いになったが）、「あながちに（何も無理に）、さばかりのことを言ひ妨げむも（そんなことを言い立てて邪魔するのも）、人の心おくべし（わだかまりを残すだろう）」と思せば（と御思いになって）、　*「儀式なし」は注に＜退出の作法が疎略ではないか。当時は格式を重んじた。＞とある。

「ともかくも（何にしても）。もとより*進退ならぬ人の御ことなれば（あの娘は元々私の裁量の及ばない身の上なので）」　*「進退（しんたい、しんだい）」は＜出処進退＞でもあるが＜自由裁量＞という意味もあるようで、ここでは後者だ。尚侍の進退が大臣の自由にならない、のではなく、「ともかくも（何もかもが）」大臣の自由にならない人なのだ。

とぞ（とのように）、聞こえたまひける（お応え申しなさいます）。

六条殿ぞ（源氏殿にしても）、「いとゆくりなく本意なし（随分急で意外だ）」と思せど（と御思いになったが）、などかはあらむ（夫婦と認めている者たちの同居を、どうして止め立て出来ましょう）。女も（妻である尚侍の君も）、*塩やく煙のなびきけるかたを（古歌の潮焼く煙のように思いの他の強風に流された形の我が身を）、あさましと思せど（情けなく御思いになったが）、盗みもて*行きたらましと思しなずらへて（大将の方はあわよくば女を盗み取って行けたらとの強風

に準えて)、いとうれしく*心地おちゐぬ(強行作戦が成功したことにしてやったりと、実に満足して安心出来たのです)。　*「しほやくけぶり」は注に＜『源氏釈』は「須磨の海人の塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり」（古今集恋四、七〇八、読人しらず）を指摘。現行の諸注釈書でも指摘する。＞とある。「風をいたみ」の「いたみ」は動詞「痛む(痛がる)」の連用形(痛がって)ではなく、形容詞「至し・甚し(甚だしい、激しい)」の語幹「甚」に状態説明の接尾語「み」の付いたもので、「風をいたみ」は＜風が激しいので＞という言い方、のようだ。先の参照歌の、山部赤人の「春の野に菫摘みにと来しわれぞ野をなつかしみ一夜寝にける」の「野をなつかしみ」と同じ語法で、何だか歌謡教室の趣き。尤も、「至し」も「痛む」も似た語感なので、「風を痛がって」と読んでも＜強風に圧されて→強引な男に横取りされて＞とは解せる。それに、「思はぬ方に」と失望感を明言しているので、現況報告ならぬ和歌なれば失恋の歌筋は分かり易い。　*「行きたらまし」は＜「行く」の連用・「たり」の未然・「まし」の連体＞で、ざっと「行きたらむ(行くことになろだろう)」の願望として＜行けたら良いな＞かと思う。が、「と思しなずらへて」は其れと何を見比べようというのか。というか、其れは何だ。其れは「盗みもて行きたらまし」と大将が今回考えた＜尚侍を御所から連れ出すこと＝今回の脱出作戦＞に違いない。では、何が比較対照なのか。それは話の流れからして、「塩焼く煙」をなびかせた＜強風＞なのだろう。　*「落ち居る」は＜落ち着く、心が静まる＞とある。「心地落ち居る」は＜安心して居られる、安心できる＞。

かの(あの月の出の夕刻に)、*入りゐさせたまへりしことを(帝が尚侍の部屋に御越しあそばしたことを)、いみじう怨じきこえさせたまふも(大将がいつまでも心配でしょうがなかったと愚痴を申しなさるのも)、心づきなく(君には雅な思い出を邪魔されて不愉快で)、なほなほしき心地して(大将が情緒に欠ける気がして)、*世には心解けぬ御もてなし(夜の夫婦生活では打ち解けない御態度のままで)、いよいよけしき*悪し(ますます機嫌が悪いのです)。　*「入りゐさせたまへりしことを」は注に＜帝が玉鬘のお部屋にお入りあそばしたことを。最高敬語が使われているので、帝のことと分かる。＞とある。　*「直直し」は＜平凡だ、情趣が無い＞。　*「よ」は「夜(夜の営み)」かも知れない。　*「悪し」は「わろし」ではなく「あし」とある。

かの宮にも(あの式部卿宮家でも)、*さこそ*たけうのたまひしか(大将をあまりに強く非難なさってしまったかと)、いみじう思し*わぶれど(だいぶ後悔なさったが)、絶えて訪れず(大将はそれきり訪れません)。　*「さこそ～しか」は＜さすがにあれでは～し過ぎてしまったか＞という言い方だろう。*「たけし」は「猛し」で＜強い、激しい＞。　*「わぶ」は＜落胆する、力を落とす＞。此処では＜後悔＞だろうか。

ただ思ふことかなひぬる御かしづきに(大将はただ念願かなった尚侍の君を自邸に迎えてのお世話に)、明け暮れいとなみて過ぐしたまふ(明けても暮れても勤しんで過ごしなさいます)。

[第七段　二月、源氏、玉鬘へ手紙を贈る]

*如月にもなりぬ(二月になりました)。　*「きさらぎにもなりぬ」は注に＜源氏三十八年二月、仲春の季節となる。玉鬘のいなくなった六条院の源氏を語る。＞とある。

大殿は(おほとのは、源氏殿は)、「さても(それにしても)、*つれなきわざなりや(大将は相談もなく事を進める人だなあ)。いとかう*際々しうとしも思はで(ここまで性急な人とも思わずに)、*たゆめられたる*ねたさを(隙を突かれた悔しさよ)」、人悪ろく(と御思いになり、またそうして妬んでいることが養父としては体裁も悪くて)、すべて御心にかからぬ折なく(君を院に引き取

ってから大将と結婚するまでの今までの一連の経緯が、すべて心に残る場面で)、恋しう思ひ出でられたまふ(恋しく思い出されなさいます)。　*「つれなし」は＜冷淡だ。よそよそしい＞などとあるが、此処では事前の＜連絡が無い、相談が無い＞ということかと思う。尚侍の君がいずれ大将邸に移るのは源氏殿も承知していただろう。その為に六条院を引き払う際の体裁として、君が最も晴れがましい形が入内だった。帝も其れを承知でその一時的な出仕を許した。しかし、この僅か数日の内裏住まいだけとは、帝も源氏殿も内大臣も考えていなかったのだろう。内大臣の反応からすると、尚侍の退出時には宴席でも設けて固めの盃でも交わそうとの政治利用まで考えていた節もある。帝も残念そうだったし、源氏殿も内裏なら通い慣れても居るし、まだ自室もあるのだろうし、尚侍に会える機会もありそうだ。それが、大将邸に匿われては、もう思うようには会えない。だから、引き取られるにしても、後々取り付く島を築いて置くための猶予が欲しかった。つまり、事前連絡をもらって会う為の口実となる何らかの小細工して置きたかった、に違いない。が、こう出し抜かれては其れも適わない。　*「きはぎはし」は＜身分にこだわる＞とか＜けじめをつける＞とかもあるが、何かの間際すれすれの＜慌しさ、余裕のなさ、こらえ性のなさ、慌て者、せっかち＞でもあるようだ。　*「たゆむ」は「弛む」で＜緩める、油断する＞。「たゆめらる」は＜油断させられる、隙を突かれる、出し抜かれる＞。　*「ねたさを」は注に＜ここまでが源氏の心。しかし、この文を受ける引用句、例えば「と」などがない。そして、「ねたさを」は下の「人悪ろく」の目的格のようになっている。＞とある。先ずは、「妬さを」は＜何と癪に障ることか＞で、「妬さ」は＜妬ましさ＞という感情を示す名詞であり、「を」は其の深さを示す終助詞だ。次に、「妬さを人悪ろく」は＜大将に嫉妬していることが外聞が悪い＞で、「妬さ」は＜妬むさま＞という形態を示す名詞であり、「を」は対象を示す格助詞だ。尚侍の君は恋人ではなく養女なのだから、その夫に妬みを覚えるのは傍目に変だ。が、本心では恋しい。という源氏殿の苦々しい立場を一寸した言葉遊びにした言い方だろうか。少し分かり難い書き方に見えるが、作者は言語にこだわる歌人として、「を」の語用の面白さを示したかったのかも知れない。

「*宿世などいふもの(これが天命というものであってみれば)、おろかならぬことなれど(その意味を疎かに考えて軽々に不幸な成り行きなどとは言えないが)、わがあまりなる心にて(私は恋情を抑え切れずに)、かく*人やりならぬものは思ふぞかし(こうして勝手に悲しんでいるのだろうか)」と、起き臥し面影にぞ見えたまふ(寝ても覚めても君の面影が瞼に浮かびなさいます)。　*「宿世などいふもの疎かならず」は＜運命は前世からの因縁なので今の状態を見ただけでは計り知れない＞という認識から＜深い意味がある、軽視できない、抗えない＞ということを言っているように見える。が、此処でそうした概念の一般論を論じるのは唐突だし、この言い方をそのように受け止めるなら内心文のカッコは要らない筈だ。この「すくせ」は今回の君と大将との結婚について、それを＜運命と考えるなら＞という意味で殿が考えている、という書き方に見えるし、時空を越えた今さらの言い換えとしては、あえて一般論の言い方は避ける。　*「人遣りならず」は＜他人が遣れと言ったものでも無い→自分勝手なこと＞とある。その「自分勝手なこと」とは何か。上にある「あまりなる心にて」は前の「恋しう思ひ出でられたまふ」ことが「あまる(度を越す、過ぎる)」ということだろうから、この「かく」は＜以上のように＞ではなく＜以下のように＞らしい。で、先読みになるが、というより是の場合は「宿世などいふもの～御文奉り給ふ」までが一文のようだが、下に「あいなく思されて念じたまふ(悪い宿世と思われなさって好転を祈念なさる)」とあるので、相当に悲観していたのだろう。「ぞかし」は＜～ということだろうか、～ということだろう＞という念押しないし再確認の言い方、とのこと。

大将の(大将という)、をかしやかに(風流に)、わららかなる気もなき人に添ひゐたらむに(和やかでいる性質も無い夫と共に暮らそうというのは)、はかなき戯れごともつつましう(一寸した冗談も出来まいと)、あいなく思されて(君に相応しくない宿縁に思われなさって)、*念じたまふ

を(源氏殿は何らかの好転を願いなさって)、雨いたう降りて(雨がだいぶ降って)、いとのどやかなるころ(とても静かな日に)、かやうのつれづれも紛らはし所に渡りたまひて(こうした暇つぶしに以前なら通っていた君の居た西の対の部屋にお出掛けなさって)、語らひたまひしさまなどの(親しく話をしていたことなどが)、いみじう恋しければ(とても懐かしくて)、御文たてまつりたまふ(殿は君にお手紙を差し上げなさいます)。　*「念ず」は＜念仏を唱えることで仏の慈悲に縋って事態の好転を期待する＞のだろうから、「あいなし(不都合、不相応)」は「宿世などいふもの」を受けて＜悪い宿世＞を意味するのだろう。なお、その「念じたまふ」中身の＜好転＞は、「あいなし」の語調からすると＜破談を願う＞ようにも聞こえるが、そういう明言を避けるべく、作者はてこうした書き方にしたのだろう。

*右近がもとに忍びて遣はすも(右近のところに内緒で届けさせたが)、かつは(それを)、思はむことを思すに(右近が変に思うかと思えば)、何ごともえ続けたまはで(詳しくは書き続けなされず)、ただ思はせたることどもぞありける(ただ思わせぶりな書き方の文なのでした)。　*「右近」は注に＜もと夕顔の女房。その死後、源氏のもとに身を寄せ、「玉鬘」巻で、長谷寺に参詣した折、椿市で玉鬘に邂逅し、玉鬘が六条院に入ってからは玉鬘付きの女房となり、鬚黒と結婚して以後も女房として付き従って仕えている。＞とある。物語上も、相当な重要人物だ。

「かきたれてのどけきころの春雨に、ふるさと人をいかに偲ぶや　(和歌 31-15)

「春雨が遠い日だとも言えなくて　(意訳 31-15)

*注に＜源氏の贈歌。「ふる」は「春雨に降る」と「古る里人」との掛詞。「ふるさと人」は、源氏自身をさす。＞とある。ただ、「ふるさとびと」は表意では＜産み腹の母親＞のようだ。「かきたれ」は「掻きたり(べそを掻いていた)」の已然形で「のどけきころ(だいぶ時間が経った今時分)」に掛かる。と同時に、「掻き垂る(一面を覆う)」の已然形で＜雨や雪の空模様＞をいう言い方として「のどけきころ(静かな今時分)」に掛かる。ところで、「書き垂る」に＜塗り潰す＞という意味があるとすれば、「かきたれて」で＜表立っては言えないが、暗意を汲んでくれ＞という言い方にもなっていそうだ。暗意とは、「はるさめにふるさとびとを」を表意の＜春雨という涙を誘う空模様に亡き母君を＞の他に＜春雨に泣き暮らす古屋の私を＞とも読んで呉れ、ということなのだろう。多分、それがこの歌の洒落た所なのだろうから、あっさりと＜「ふるさと人」は、源氏自身をさす。＞と言ってしまうと、味わいが損なわれる恐れがある。いや、これは注釈への嫌味ではなくて、解釈の仕方の問題として。

つれづれに添へて(何かにつけて)、*うらめしう思ひ出でらるること多うはべるを(心残りに思い出されることが多くありますのを)、*いかでか分き聞こゆべからむ(何とか御会いして詳しくお話し申し上げたいものです)」　*「うらめし」は殿がわざと分かり難い言い方をしたもので、個別の＜憎しみ、悔やみ、悲しみ、嘆き＞ではなく、漠然と＜今でも気になること、心残り＞と言っているのだろう。　*「いかでか分き聞こゆべからむ」は＜どのようにご説明申し上げたら良いでしょう＞という言い方だろうが、是は手紙文なので＜手紙では説明できないので何とか御会いしたい＞という意味になりそうだ。

などあり。

隙に忍びて見せたてまつれば(右近は君に側に他の女房が居ない時にこっそりと源氏殿の御文をお見せ申し上げると)、うち泣きて(君は思わず涙を溜めて)、わが心にも(自分でも)、ほど経るままに思ひ出でられたまふ御さまを(時が経つほどに思い出されなさる殿のお姿を)、まほに

(正直に)、「恋しや、いかで見たてまつらむ(何とかお目にかかりたい)」などは、えのたまはぬ親にて(とても仰れない親なので)、「*げに(確かに)、いかでかは対面もあらむ(如何したら御会いできるのだろう)」と、あはれなり(動揺します)。　*「げに」は源氏の手紙の「いかでか分き聞こゆべからむ」を受ける。と注にある。

時々、*むつかしかりし御けしきを(始末に困った殿の御催しを)、心づきなう思ひきこえしなどは(初めは男の厭な性だと思い申していたことなどは)、*この人にも知らせたまはぬことなれば(この右近にも知らせなさらなかったことなので)、心ひとつに思し続くれど(君は独り内心で殿を恋しく思い続けなさるが)、右近は、ほのけしき見けり(御二人の仲をうすうす気づいていました)。いかなりけることならむとは(ただ、本当の所がどうだったのかは)、今に心得がたく思ひける(今でも分からなかったのです)。　*「むつかしかりし御けしき」という言い回しは、少なくもこの物語に於いては、具体的な事柄を示していると思う。「むつかし」は＜不快だ、うっとうしい、厭だ、煩わしい、面倒だ、気味が悪い、恐ろしい＞と古語辞典にある。何とも怖ぞましいが、是は君が＜始末に手を焼いた、困り果てた＞事を示すと共に、何に手を焼いたのかも示している。「むつかし」は子供の「むつかり(憤り、過剰反応による生理変調)」を主に母親が宥めることを思わせる語感だ。「むつかり」は女が鎮めるべき男の激情、に通じる。で、「けしき」だが、是は＜様子、状態＞ではあるが＜意向＞を意味することもあり、ある物の勢いが現れている＜状態＞のようだ。で、「みけしき」なのだから、それは＜殿の生理変調＝勃起＞だ。その勃起は、殿が君の体を弄び、口を吸い、口を洩らすことで猛り狂う。それ自体も君には負担感があったのかも知れないが、君は大将には濡れなかったようだから、殿には濡れたのだろう。そうであっても、「むつかしかり(処理に困るもの)」とあるのは君が殿の射精のさせ方に不慣れだった、という晩生の事情説明だ。養父との情事という外聞の悪さが「心づきなし」というのは、右近に対して隠し立てをする理由としては成立しない。右近は源氏殿が実父で無いことを知っていたのだし、君を殿の妻に相応しいとまで思っていたのだから。その右近に情事を隠そうとしたのなら、正に晩生だったことをであり、その動機は筑紫から付き従っていた一派にありそうだ。君は晩生だったから召人業務のような男の生理処理をさせられることが「心づきなし」だったのであり、事の秘匿の為に床紙や布巾の始末を特定の女房に任せるというのが面倒だったのかもしれないが、濡れた女なら男の反応は愛しい筈で、是は当初はという意味なのだろう。　*「この人」は注に＜右近をさす。＞とある。右近は、王命婦や惟光と並んで光君の急所を知る重要人物だ。だから私は、君が右近には殿の言い寄りを相談していただろうと思っていたので、この記事は意外だった。作者が今さら奇麗事で済ます心算とは思えないが、殿は君を孕ませこそしなかったようだが、親が童女の頭を撫でるのとは違う愛撫を姫に施したのであり、胡蝶巻第三章第三段には「御手をとらへたまへれば、女、かやうにもならひたまはざりつるを、いとうたておぼゆれど、おほどかなるさまにてものしたまふ」という書き方をしてあり、これは歌の贈答の場面だが、この部分の文だけを取り出せば濡れ場そのものの語り口だ。さらに、胡蝶巻第三章第四段には「言に出でたまへるついでの、御ひたぶる心にや、なつかしいほどなる御衣どものけはひは、いとよう紛らはしすべしたまひて、近やかに臥したまへば」と具体的に肌を合わせる描写まであって、もはや思わせぶりでは済まされない。いや、それどころか同第五段に至っては、「色に出でたまひてのちは、「太田の松の」と思はせたることなく、むつかしう聞こえたまふこと多かれば」と作者自ら＜思わせぶりではなく、殿は実際に性処理をさせなさった＞と明示した上に、その直ぐ下に「ことの心知る人は少なうて」と数人は事の真相を知っていたという書き方までしている。となれば、その数人には兵部の君と右近が必ず含まれる、と思うのが普通だろう。私はそう思った。それを、此処ではっきり明示して否定されるとは思ってもいなかった。まぁ、仮に右近が知らされていなかったとしても、いくら胡蝶巻がお目出度い彩りの艶笑譚口調だとはいえ、「心ひとつに思し続くれど」が女房の誰一人と事の真相を知る者はいなかったことを意味する、とは私は認めない。大体が、右近の設定に付いては私は以前から作者に不満がある。右近は夕顔の乳

母子で、必ずや内大臣とは当時の頭中将と面識があったに違いない。が、ついぞ、二人は遭遇しない。いや、遭遇しないことは有り得るが、時の頭中将は常夏とは夕顔の行方を捜していたのであり、その手掛かりの一つが右近の行方だった筈で、頭中将の腹心がその辺の事情を全く関知出来なかったとすれば、それなりに周到な配慮が右近になければならず、そのことに右近自身や源氏殿が留意した形跡が無いことが不自然だ。源氏殿と藤原殿との関係に於いて、特に源氏殿にとって藤原殿に対する深層心理での緊張感はこの物語の主軸たる重要事項の筈なので、実際は留意していたが書く程のことでも無かった、などという言い訳は聞かない。などと、私は一人で勝手に興奮しているが、私の不満とは無関係に話が進むことは承知している。しかし、此処の文は少なからず衝撃だ。

御返り(御返歌は)、「聞こゆるも恥づかしけれど(御詠み申し上げるのも気が引けるが)、*おぼつかなくやは(お返事をお待ちでしょうから)」とて、書きたまふ。　*「おぼつかなし」は＜はっきりしない→はっきりさせたい、気掛かりだ＞で＜返事が待ち遠しい＞となるらしい。

「眺めする軒の雫に袖ぬれて、うたかた人を偲ばざらめや　(和歌 31-16)

「うたかたを軒の雫に眺め見る　(意訳 31-16)

*注に＜玉鬘の返歌。源氏の歌の「春雨」に応じて「長雨」と応える。「うたかた人」は源氏をさす。「ながめ」は「長雨」と「眺め」の掛詞。「うたかた」は水の泡の「泡沫（うたかた）」の意とかりそめの意を掛ける。「雫」「濡れ」「泡沫」は縁語。わたしも涙に袖を濡らして恋い慕っております、という主旨の歌。＞とある。「うたかた」が水の縁語としての語用なのは確かだろう。「うたかた」は＜水面に浮かんでは消える泡。はかないもののたとえ。＞と古語辞典にある。ところで、さらに辞典には「うたかたびと」を＜うたかたのようにはかない人の命＞と説明してあり、その引例に＜「うたかたは息消えて帰らぬ水の泡とのみ散り果てし」(謡・夕顔)＞を示している。「謡(うたひ)」は室町時代に形成された能舞の歌詞で、「夕顔」は源氏物語から引かれた話との事。辞典編者が当歌の解釈の為にこの引例を掲載したとは思えないが、「うたかたびと」がだいぶ前から広く＜夕顔＞を示すと認識されていたらしい事は窺える。だから君は、少なくとも表面上は「うたかたびと」を故母上として詠んだ訳だ。そうでなければ、カムフラージュにならない。で、それに託けて源氏殿が慕わしいと滲ませたということのようだ。が、それにしても「かりそめ」は＜一時的なはかないもの＞ではありそうだが、語感に＜本当ではない仮のもの＞という響きがあって、殿に対する言い方に馴染まない。かといって、殿は故人ではないから＜はかない＞とも言えない、という渋谷教授の配慮は分かる気がする。そこで、「うたかた」を仮初めに考えて、「うた」は「打つ」の語感で、「かた」は「形」で＜形状、状態＞だ、としてみる。と、「打つ方」が＜意志を持って叩き合わせた状態＞の概念に見える。で、「うたかた」を「打たむ方(偶然に一時的に表われた状態)」だとしてみると、上手く説明できる。だから、「うたかた」は＜はかなさ＞の他に＜一時的な偶然性＝宿世ではないが現世に於いて出逢えた、しかし敢えて言及すべき稀な重要人物＝将来は誓えないが自分の人生に残る懐かしい人＝遠くで大事に思う人＞を表す語用だったと解したい。で、ほんの仮説ながらも、「うたかたびと」の語感は＜手の届かない向こう側の人＞。「偲ばざらめや」は「偲ぶ(懐かしく思う)」「ざり(ことのないようにする)」「む(としてみる)」「や(ことなどあるものか)」。

*ほどふるころは(時間が経ってみると)、*げに(仰る通り)、ことなるつれづれもまさりはべりけり(身に沁みて一寸したことで思い出される懐かしさが募ります)。*あなかしこ(ご免下さいませ)」　*「ほどふる」は注に参照歌として＜『河海抄』は「君見ずて程のふるやの廂には逢ことなしの草ぞ生ひける」（新勅撰集恋五、九四五、読人しらず）を指摘、『集成』も指摘する。＞が紹介されている。「ふるや」が「経るや(ずいぶん時が経ったものだ)」と「古屋(古びた家、自邸の謙譲表現)」。「逢ふことなし(会わない)」と「事無草」。「こ

となしぐさ」はシノブグサの異名、とのこと。ただ、「ほどふるころ」はこの歌を踏まえなくても＜だいぶ時間が経った今の頃＞の意味になる一般的な言い方に見えるが。　*「げに」は殿の贈歌にあった「ふるさとびと」に掛けている。*「あなかしこ」は＜何と畏れ多い＞だが、手紙の文面の最後に＜以上＞の意味で添える定句としては＜畏まって申し上げます＞という言い方で＜ご免下さい＞という末尾の挨拶に代えるものだろう。

と、*ゐやゐやしく*書きなしたまへり（殊更に故母への思い遣りに感謝するかの丁重さでお返事なさいました）。　*「ゐやゐやし」は「礼礼し」で＜礼儀正しい＞とあり、今の「恭しい（うやうやしい、相手を敬って丁重な姿勢をとる慎ましさ）」のことらしいが、新カナで発音を書くと「うぃうぃやし」となるのは意外だった。*「書き做す」は注に＜「なす」はわざと、意識的にのニュアンスを添える。＞とある。故母君を偲んで殊更しめやかに手紙を遣り取りする、という体裁を付けた、ということらしい。が、夕顔の死去は八月で二月ではない。

［第八段　源氏、玉鬘の返書を読む］

*引き広げて（その君の御返書を殿は六条院で待ち侘びて開いて）、*玉水のこぼるるやうに思さるるを（返歌に「軒の雫に袖ぬれて」とあるのを、古歌にある「雨止まぬ軒の玉水数知らず」のように大泣きするほど愛しく思われ為さるのを）、「人も見ば（人が見たら）、うたてあるべし（変に思われるだろう）」と、つれなくもてなしたまへど（平静を装っていらっしゃるが）、　*「引き広ぐ」は＜早速開く＞語感で、それはその文書を＜待ちかねていた＞からだ。なお、注には＜場面は六条院に移る。源氏がその返書を広げて。＞とある。　*「玉水のこぼるるやうに」は注に＜玉鬘の返歌にあった「軒の雫」から「玉水のこぼるる」と連想。『河海抄』は「雨止まぬ軒の玉水数知らず恋しきことのまさるころかな」（後撰集恋一、五七八、兼盛）を指摘、『集成』も指摘する。＞とある。従って、そのように補語する。

胸に満つ心地して（胸が一杯になる思いがして）、かの昔の尚侍の君を（かつての尚侍の君であった昔の右大臣の六姫を）*朱雀院の后の（一姫であった朱雀院の母后が）切に取り籠めたまひし折など思し出づれど（殿から遠ざけるべく本気で実家に閉じ込めなさった時のことなどを思い出しなさったが）、さしあたりたることなればにや（この手紙が目下の差し当たっての事だからだろうか）、*これは世づかずぞあはれなりける（この君の身の上こそが世間一般とはかけ離れたものに思えて可哀相なのでした）。　*「朱雀院の后」は注に＜朱雀院の母后、すなわち弘徽殿の大后をさす。＞とある。　*「これ」は＜君の身の上＞。係助詞「は」は「なればにや」という状況説明句を受けた結論対象の「これ」を排他的に＜特にこれが、これこそが＞と明示する。「世づかず」は＜世間並みでは無い＞。「△ぞ○なりける」は＜△ということで○なのでした＞という理由説明の文型。

「*好いたる人は（恋している人というものは）、心からやすかるまじき*わざなりけり（心から休まることが無い困った事態なのだ）。*今は何につけてか心をも乱らまし（もう人妻である君には事に触れて心を躍らせるのは止そう）。似げなき恋の*つまなりや（似合わない恋の相手なのだから）」　*「好いたる人」は＜好色な人＞ではないだろう。「好い」は「好き」の音便。「好き」は「好く」（自動詞カ行四段活用）の連用形。で、「好く」は古語辞典では＜好色だ、風流だ、ものずきだ＞とされる。が、現代語にある＜好む、恋する＞という説明がない。が、古語に＜好む、恋する＞という意味がない、筈もない。私は＜語感＞という語を用いて、独断での解釈を繰り返しているが、これはその語の＜語意＞の正当性を傍証的に説明する力量が無いことによる方便ではあるが、今までの見聞からして相当程度にその正当性が＜予感＞出来る時に持ち出しているのであって、つまりはこの歳になっての自分なりに納得できる読み方を心掛けている一つの表れだ。勿論、傍目にはド素

人の身勝手な思い付きに過ぎないが、それだけに感性として共感できるかどうかという、言葉の本質に懸けている、という独善的姿勢を再確認して、遠慮なく論を進める。で、「好く」は＜恋する＞だと直感する。「たり」は状態を示す助動詞だから、「好いたる」は＜好いている＝恋している＞だ。尤も、「好きたる」が＜好き者であるところの＞という言い方なのを見れば、「好い」は単に「好き」の音便というよりは「好う」という別の語の連用形であったものが、後に混同して現代語の「好く」に至った、という事はあるのかも知れない。「好う」は「吸ふ」と近似音だし、近似は連想を喚起するので＜引き入れる、受け入れる＞という概念の共有は起こり得る、ような気もする。　*「わざ」はクセのある語だ。一般的に＜事物、行動＞をいう時もあれば、特に優れた＜仕事、技術＞をいう時もある。そして「しわざ」と同義の場合には＜謀り事＞や＜神のイタズラ＞でさえあり、それによってもたらされた＜困った事態＞でもある。「なりけり」は説明語調。　*「今は」は＜今の客観状況では＝もう人妻である君には＞。「か～まし」は反語表現で＜増すのは止そう→止めておこう＞。　*「つま」は＜妻＞や＜夫＞だけでなく、恋仲にある＜相手＞であり、さらには動物全般の＜雌雄にいう異性。＞と古語辞典にある。「なりや」の「や」は「なり」と説明された一定の理屈が初めて分かった驚きの感嘆詞で、殿と君が「似げなき」仲だという、傍目には歴然としていることに、やっと気付いた、という文だ。ただ、殿が君を当初からそのように客観的に引いて見て冷静でいたとしたなら、この物語自体が存在しない、ということではあるかも知れない。

と(と殿は君を思い諦めることで)、*さましわびたまひて(熱情が冷めるのを寂しく御思いになって)、*御琴掻き鳴らして(和琴の流し弾きで)、*なつかしう*弾きなしたまひし爪音(君が好んで弾いていらした曲の爪音が)、思ひ出でられたまふ(思い出されなさいます)。　*「さましわぶ」は＜思いを静めて寂しくなる→諦めて黄昏る＞という言い方のようだが、そうすると「冷む」の語感が消えてしまうので、前の格助詞「と」に＜諦める＞を込めてしまって、「さます」という他動詞を＜冷める＞という自動詞で言えるようにした。　*「おんこと」は注に＜和琴。下に「東の調べ」とある。＞とある。なお、「鳴らして」の「鳴らし」は「鳴らす」の連用形中止で＜鳴らすこと＞を意味する名詞。で、「御琴掻き鳴らし」は＜和琴を流し弾きし＞という動作ではなく、＜和琴の流し弾き＞という事柄をいう言い方。だから、「鳴らしたまひて」という敬語表現ではない。ので、それに付いた格助詞の「て」は動作説明の＜して＞ではなく、手段説明の＜で＞を示している。　*「なつかしう」は「弾きなす」を修辞するので、殿が＜懐かしく(思い出す)＞のではなく、君が＜好んで(弾いた)＞ということ。　*「弾きなす」は「弾き做す(弾く格好をする)」ではなく「弾き成す(一曲を演奏し切る)」だろう。

*あづまの調べを(和琴ならではの東国風の調弦の)、*すが掻きて(撥弾きで)、　*「あづまのしらべ」に注釈はない。まぁ、どうせ言葉で説明されても、どういう音なのかは分からないが、Yahoo!百科の「和琴(わごん)」のページには調弦例が示されていて、東遊(あづまあそび、東舞)の場合はA6+9みたいな、ちょうどギターのレギュラー・チューニングの２フレットにカポタストを付けた開放弦弾きに近いように説明されていたのには驚いた。で、その「東遊び」だが、大辞泉に＜古く東国地方で、風俗歌に合わせて行われた民俗舞踊。平安時代から、宮廷・貴族・神社の間で神事舞の一つとして演じられた。＞とあり、飛鳥以来の遣唐使などからもたらされた唐の最新文化の一環としての、今様の音楽概念や楽器がいよいよ都に根付くのに伴って、改めて意識されたらしい日本の独自性の一つとして都に取り上げられた地方音楽、という位置付けだったようだ。ところで、その六弦琴が「和琴」と言われるのは、当時の先端文化として輸入された中国式の筝とは別に、それ以前から日本に伝わっていたもののようで、平安期までには既に国内で熟なれて、土着の歌や芸能に取り込まれていた楽器だったようで、その調弦方法が日本独特のものと認識されて国風文化の主たる楽器に位置付けられた、ということらしい。そういう経緯から和琴を「東琴(あづまごと)」「やまとごと」とも呼んだようだ。　*「すががき」は「清掻き・菅掻き」と表記され＜和琴の弾き方の一つ。河海抄によると「右の手にてバチにて掻くを菅掻きと云ふ」とある。＞と古語辞典にある。先にあった「爪音」は爪で弾いた音だろうが、撥弾きは琵琶系の抱える奏法だから、琴柱による調弦方法とは言っても、筝の様な置

く奏法とは違って、付け爪で弾く演奏方法とは並立し難い。有り得ないとは言えないし、多くの人が多くの試行をしてこそ豊かな音表現は期待できるのだろうが、右手の撥弾きを和琴の基本の奏法とすれば、左手は基本的に音階押さえをしないようなので、素手で爪弾くか撥弾きの消音で演奏に変化を付けたと見る方が妥当だ。

「*玉藻はな刈りそ(美しい水草は刈るな)」　*注に＜風俗歌、鴛鴦の一節。＞とあり、その参照出典は「鴛鴦　たかべ　鴨さへ来居る　藩良の池の　や　玉藻は真根な刈りそ　や　生ひも継ぐがに　や　生ひも継ぐがに」とある。「風俗歌(ふぞくうた)」は＜古代、地方の国々に伝承されていた歌。平安時代、宮廷や貴族社会に取り入れられ、宴遊などに歌われた。国風(くにぶり)。国風歌。風俗(ふぞく)。ふうぞくうた。＞と大辞泉にある。ざっと民謡らしい。「鴛鴦」は「をし」で＜オシドリの古名＞とのこと。「たかべ(高部)」は＜コガモの古名＞。「藩良」は別掲に「原」とあるから読みは「はら」のようだ。絵としては、豊かな湿原の水辺に集う野鳥たちが水草を餌にするのか巣に使うのか採っているが、根こそぎ浚うと湿原自体が枯れてしまう、といった歌筋らしい。自分に能力があるからといって、全てを自分のものにすれば、後は先細りだ、だから私は身を引くことにしよう、みたいな心算で殿は是を歌ったのだろう。相手の利幅を見て、自分の取り分を考えないと結局は共倒れだ、という言い方は含蓄がある。実際に、源氏殿と藤原氏との関係もそういう面は色濃くありそうだ。それと、歌の色気としては「玉藻(たまも)」に女陰、「真根(まね)」に男根の語意はあるだろう。それと、ついでの思い付きだが「をしたかべ　かもさへきゐる　はらのいけの」が＜知ったかぶりで少しの文句も遮る心算で居るようだが＞に聞こえる。語呂の良い文句は誤解も含めて発想を広げる。催馬楽などにも感じるが、こうした歌が広まるには何か契機がある筈で、この歌にもそれなりの下敷きの謂れや複意・暗意があるのかも知れない。ともかく、「玉藻はな刈りそ」は舌足らずで「玉藻は真根な刈りそ」でなければ＜玉藻は一切採るな＞という意味になりかねないが、当時の読者には風俗歌の「鴛鴦」は良く知られていて、「玉藻はな刈りそ」で＜玉藻は根絶やしするな＞の意味と分かり、皆まで言わない認識の共有感こそが心地良かったのかも知れない。ところで、「な～そ」は禁止の文型とされ＜～するな＞と説明される。そして、この「な～そ」は文末の「～な」よりも穏やかな禁止表現らしい。また、「～そ」の「～」は動詞の連用形で、「～な」の「～」は動詞の終止形とのこと。この例文だと「刈りそ」と「刈るな」の違いだろう。是を統一して説明するには補助線が必要だ。で、仮に「な」を、元は「けしからず(規範に反する)」という打消文を伴う言い方になる語ではあるものの、それ自体は上の名詞を対象強調する係助詞だ、としてみる。と、「刈るな」は元は「刈るなけしからず」で＜刈る(ということ)は反則だ＞という言い方なので、動詞「刈る」は動作概念の名詞化となる終止形を取り、後に「けしからず」が定句ゆえに省略されて＜刈ってはいけない＞になった、となる。そして、「刈りそ」は「真根な刈りそけしからず」だから＜マネ(というもの)は刈ってしまうのは反則だ＞で＜刈ってしまってはいけない＞という「しまう」と一呼吸置いた婉曲表現なのだ。つまり「そ」は補助動詞「為す・成す(～してしまう)」の文末言い切り音便による変形已然形、とは我ながらさすがに強引な言い方だが、だから、それに連なる動詞「刈る」の活用が連用形となるのだ。とかね。

と(と殿が)、歌ひすさびたまふも(歌謡曲を口ずさみなさるのも)、恋しき人に見せたらば(君に見せたならば)、あはれ過ぐすまじき御さまなり(感動せずには居られない御姿です)。

内裏にも(うちにも、内裏にお座します帝におかせられても)、ほのかに御覧ぜし御容貌ありさまを(ほのかに御覧あそばした君の御顔立ち御姿を)、心にかけたまひて(忘れられずに御思いなさって)、

「*赤裳垂れ引き去にし姿を(女官姿で退出した尚侍の君が名残惜しい)」　*注に＜「立ちて思ひ居てもぞ思ふ紅の赤裳垂れ引き去にし姿を」（古今六帖五、裳、三三三三）の下の句。＞とある。この歌は万葉集2550番に「赤裳裾引き」として掲載されているらしいが、いずれにしても「赤裳」に特別な意味や事情が込められてい

るのかは、ちょっとweb検索した限りでは分からなかった。ただ、赤裳姿は女官の制服だった、少なくともそういう時期があったことだけは確からしい。尤も、「赤裳」は＜赤い裳＞だろうし、今の巫女さんの赤い袴姿に通じるものかも知れないなどと説得されそうにもなるが、本当の所は赤かったのか、赤いとしても赤一色だったのか、織柄や質感は如何だったのか、相当な幅がありそうで、むしろ女官の裳装束を「赤裳」と称した可能性すらある。それと、裳装束は平安期当時には儀礼的な時代遅れの服装だったらしい記述がこの物語にもあったので、尚侍の君が実際に「赤裳垂れ引き」ながら御所を「去にし（いにし、退去した）」というよりも、女官の退出場面の比喩として帝はこういう言い方をしたのだろう。語用としては、「紅の（くれなゐの）」が＜ベニバナ染めの＞という言い方で「赤」に掛かる枕詞らしいが、それだけならベタに過ぎるだけで、何より歌筋が見えない。「くれな居」は「暮れず（年季が明けない→明きらめ切れ無い）」で「居る」という思いが込められてこその語用なのだろう。

と、憎げなる古事なれど（未練がましい古歌だが）、御言種になりてなむ（それが口癖のようになって）、眺めさせたまひ*ける（君を惜しんでいらしたようです）。　*「ける」は「けり」の連体形で＜由あり＞などが省かれた伝聞口調。殿からの手紙文なのだろう。

御文は（そのような内容の殿からのお手紙は）、忍び忍びにありけり（何通かこっそりとありました）。身を憂きものに思ひしみたまひて（君は我が身を不遇と思い込みなさって）、かやうのすさびごとをも（こうした晴れやかな話題も）、あいなく思しければ（不釣合いにお思い為さったので）、心とけたる御いらへも聞こえたまはず（打ち解けたお返事も差し上げ申しなさいません）。なほ（それにつけても）、かの（殿が）、ありがたかりし御心おきてを（勿体無くも尚侍としての参内をお考え下された）、かたがたにつけて思ひしみたまへる御ことぞ（周到なご配慮の程を）、忘られざりける（忘れられないようでした）。

［第九段　三月、源氏、玉鬘を思う］

*弥生になりて（三月になって）、六条殿の御前の（殿のお部屋の前庭の）、藤、山吹のおもしろき夕ばえを見たまふにつけても（藤や山吹が美しく夕焼けに映えるのを御覧になっては）、まづ見るかひありてゐたまへりし御さまのみ思し出でらるれば（何よりもこの風情に合っていた君のお姿ばかりが思い出されなさって）、春の御前をうち捨てて（お部屋のある春の町を打ち捨てて）、こなたに渡りて御覧ず（夏の町の西の対に来て、その前庭を御覧になります）。　*「やよひになりて」は注に＜晩春、いよいよ玉鬘の山吹の花のイメージにぴったりの季節となる。舞台は六条院。＞とある。

呉竹の籬に（くれたけのませに、竹の網垣に）、わざとなう咲きかかりたるにほひ（自然に馴染んだように咲き掛かっている山吹の色艶が）、いとおもしろし（とても面白い）。

「*色に衣を」　*注に＜『河海抄』は「梔子の色に衣を染めしより言はで心にものをこそ思へ」（河海抄所引古今六帖五くちなし）を指摘し、『全書』『対校』『集成』がこの和歌を指摘する。また『弄花抄』は「思ふとも恋ふとも言はじ梔子の色に衣を染めてこそ着め」（古今六帖五、くちなし、三五〇八）を指摘し、『評釈』『全集』『集成』がこの和歌を指摘する。「梔子」で染めた色は黄色、山吹の花から連想され、さらにこの和歌へと連想が及ぶ。前者の和歌では下の句に、また後者の和歌では上の句にそれぞれ源氏の気持ちがこめられている。＞とある。山吹色の着物を着た君の姿を懐かしく思い出している、という殿の心象描写らしい。

などのたまひて、

「思はずに井手の中道隔つとも、言はでぞ恋ふる山吹の花　（和歌 31-17）

「思い掛けずに隔つとも、袂裁つとも言い難し　（意訳 31-17）

*注に＜源氏の独詠歌。玉鬘への絶ちがたい恋情を訴えた内容。「井手の中道」は山吹の名所の井手へ通じる道。和歌に数多く詠まれた地名、歌枕。山城国綴喜郡井手町。＞とある。「思はずに出での中道」に山吹の名所の「井手の中道」を掛けるという、「山吹の君」を偲んでこその実に上手い言い回しだが、歌としてはこの名所の地名が在ってこそ成立しているわけで、何とも都合の良い地名があったもんだし、作者は「井手の中道」という文句を「山吹」と絡めて詠む発想を、この地名を知った時から抱いていたに違いない。また、前振りの「色に衣を」については、参照歌の両方を踏まえた詠み方をしているように見える。

*顔に見えつつ（面影が浮かんで、忘れられない）」　*注に＜『河海抄』は「夕されば野辺に鳴くてふかほ鳥の顔に見えつつ忘られなくに」（古今六帖六、かほどり、四四八八）を指摘。現行の注釈書でも指摘する。＞とある。「かほどり」は「容鳥」と表記され＜カッコウ。また単に「美しい鳥」の意という。＞と古語辞典にある。その鳥が夕方に鳴くと、容鳥が鳴いていると気付かされて、恋しい人の顔が浮かんで忘れられなくなる、と「容（かほ）」だから「顔（かほ）」のようで、「かほどりの」は殆んどダジャレみたいな趣きだ。

などのたまふも（などと洒落てみ為さるが）、聞く人なし（語るべき相手は居ません）。かく（このように）、さすがにもて離れたることは（実際に遠く離れてしまったことを）、このたびぞ思しける（この山吹の季節に殿は実感なさいました）。げに（実に）、あやしき御心のすさびなりや（複雑な御心境具合だったのです）。

*かりの子のいと多かるを御覧じて（鴨の卵がたくさん献上されているのを御覧になって）、柑子（かうじ、ミカンや）、橘などやうに紛らはして（橘の実のように見せかけなさって）、わざとならずたてまつれたまふ（何気ない贈り物のように君にお送りなさいます）。御文は（添えたお手紙は忍ばせる訳にもいかないので）、「あまり人もぞ目立つる（他の人の目にも付く）」など思して（と御思いになって）、すくよかに（改まった文面で）、　*「雁の子」は＜雁（がん）の子。また単に、雁・鴨（かも）などの水鳥。＞または＜雁や鴨の類のたまご。＞と大辞林にある。

「おぼつかなき月日も重なりぬるを（お目にかからない月日も重なりましたのを）、思はずなる御もてなしなりと恨みきこゆるも（思いの他の素気無い御態度と御恨み申し上げますが）、御心ひとつにのみはあるまじう聞きはべれば（あなたの御一存だけでの御無沙汰ではないものと聞いておりますので）、ことなるついでならでは（何かの折にででもなければ）、対面の難からむを（お会い出来なさそうだと）、口惜しう思ひたまふる（残念に思っております）」

など、親めき書きたまひて（親心の懐かしさのようにお書きになって）、

「同じ巣にかへりしかひの見えぬかな、いかなる人か手ににぎるらむ　（和歌 31-18）

「明き巣には貝を土産の甲斐も無い　（意訳 31-18）

*注に＜源氏の贈歌。「かひ」には「卵（かひ）」と「効」を掛ける。鬚黒が玉鬘を手放さないことを恨んだ歌。＞とある。今でも、卵を「かひ」と言っている地方が有るとすれば、「甲斐(かひ、効果・値打ち)」は一般的な日常語なので、まるで今の歌のように納得できる詠み方かも知れない。こういう洒落は分かり易いし、「甲斐の見えぬ」も「手に握る」も普通に感覚が伝わる言い方だ。また、「かひ」は「殻」であり手応えのある硬いもの、という語感かも知れない。そして当然に「かひ」は「貝」であり、「イカ」とは海つながりの縁語なのだろう。それに、「イカ」は貝類の一進化形という説もあるらしい。ただ、私は「かひ」で卵を思い付かないので、殿が卵を果物に見立てて贈ったこと、そうでなければ鴨卵は特に贈り物になるほどの物でも無かったのか、に、この歌を添えた、というか、この歌の為に卵を贈ったらしい、遊び心を、感じるのではなくて理屈で理解したので、折角の話も興醒めだ。

などか(どうして)、さしもなど(これほどまで疎遠に為さるのかと)、心やましうなむ(納得できません)」

などあるを、大将も見たまひて、うち笑ひて(勝者の余裕で笑みを浮かべなさって)、

「女は(女は嫁いだからには)、まことの親の御あたりにも(実父の御住まいであっても)、たはやすくうち渡り見えたてまつりたまはむこと(気軽に出掛けてお目に掛かり申そうなどということは)、ついでなくてあるべきことにあらず(折り入った御用の序でが無ければ有るべきことでは無い)。まして(だというのに)、なぞ(なんで)、この大臣の(この実父でもない源氏殿は)、をりをり思ひ放たず(いつまでも未練がましく)、恨み言はしたまふ(其方に会いたいと訴えなさるのだろう)」

と、つぶやくも(思ったままの独り言のように憎まれ口を利きなさるのも)、憎しと聞きたまふ(君は不愉快にお聞きになります)。

「御返り(御無沙汰を言い訳するお返事は)、ここにはえ聞こえじ(私にはとても申し上げられません)」

と、書きにくくおぼいたれば(君が書き難くお思いだったので)、

「まろ聞こえむ(わたしが申し上げよう)」

と代はるも(と大将殿が代わるのも)、*かたはらいたしや(女房たちの目からも僭越に見えます)。　*「かたはらいたし」は「傍ら痛し」だから、当事者の君が＜傍目を気にして決まり悪く思う＞のではなく、語り手と同業の側控え女房たちが＜傍らに大将を僭越に思う＞のだろう。もし、君の気持ちに添うなら＜傍目に決まり悪い＞のではなくて＜殿に申し訳無い＞のだから、「あはれ」とか「いとほし」く「思す」のだろう。

「巣隠れて数にもあらぬかりの子を、いづ方にかは取り隠すべき　(和歌 31-19)

「里に下がった凡人を、隠す筈など御座いません　(意訳 31-19)

*注に＜鬚黒が玉鬘に代わって返歌。「かりの子」に「雁の子」と「仮の子」を掛け、「とり」に「鳥」と「取り」を掛ける。＞とある。「取り」に「鳥」が掛かることに、大将ならさぞ喜んだことだろう、と思わせる作者の感性は脱帽ものだ。「巣」は自邸を粗末な家と卑下しているのだろう。「巣隠れて」は＜(御所から)里下がりして＞。だから、

表意は「数にもあらぬかりの子を」は＜帝妃など滅相も無い我が妻を＞となり、「かりのこ」は鴨卵を贈られたことへの御礼状ならではで＜尚侍の君＞を意味し、「数にもあらぬ（たいした者でも無い）」という言い方が実父であれ養父であれ君の親方に対して非礼とならない、という朝廷の権威を逆手に取って、大将が大臣に物申すと言う小賢しい言い草だ。と同時に、源氏殿には「仮の子」の意で＜実子でも無いこの君を（余りお構いなく）＞という皮肉の当て付けを感じさせるが、大将自身はそんな無礼は決して申しません、という立場を守れる。全ては性急なまでに退出を急いだ大将の強攻策の賜物だ。是が隠然たる藤原右家の実力まで示していると見るのは穿ち過ぎだろうか。ましてや、自分は風流を体現できないが、その意味するところは全て分かっている、とでも言いたそうな道長の影、とはさすがに言い過ぎか。「いづ方にかは取り隠すべき」は＜何処に隠し込めば良いのでしょう→どうして隠し立てなど致すものですか＞。

よろしからぬ御けしきにおどろきて（大殿の不機嫌な御様子に驚いております）。すきずきしや（このように風流ぶって御返歌申しまして、失礼だったでしょうか）」

と聞こえたまへり（とお応えなさいました）。

「この大将の（この大将が）、かかるはかなしごと言ひたるも（こうした実利の無い頼り無く移ろう気持ちの和歌を詠んだというのも）、まだこそ聞かざりつれ（未だかつて聞いたことが無かった）。めづらしう（珍しいことだ）」

とて（と若い妻を持って少しは軟化したかと）、笑ひたまふ（源氏殿は笑いなさいます）。心のうちには（しかし内心では）、かく領じたるを（大将が君をこのように手に入れてしまったことを）、*いとからしと思す（実に苦々しく御思いになります）。　*「いとからし」は印象的だ。是は源氏殿が藤原右大将に抱いた敗北感と言うよりは、藤原氏に対する挫折感だ。弘徽殿大后の恨みも少しは晴れるか。